
とある天使の潜在能力

銀雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある天使の潜在能力

【Nコード】

N9202U

【作者名】

銀雷

【あらすじ】

とある時代のとある場所に存在した『学園都市』そこでは能力開発という行為が行われ、電撃使い、発火能力、空間移動、等々レベル5〜0までで振り分けられていた

一方『神の右席』その中身はローマ教皇よりも強大な権力をもった、ローマの暗部。彼らは一人一人、天使の名前を名乗っている・・・ウリエル、ラファエル、ガブリエル、ミカエルの四大天使だ。そんな闘いを生き抜く異端の少年の物語。

序章（前書き）

初めまして、よろしくお願ひします!!

序章

神の右席・・・前方のヴェント、左方のテッラ、後方のアックア、そして右席のフィアンマで構成された少数精鋭の組織である・・・

しかし、実際にはまだ関係者はいた・・・その中の一人は、外方のメタトロン・・・

そんな彼らが作り出した話である・・・

ローマのとある場所、其処では二人が会談をしていた・・・

「ああん？何が、危険な野郎を殺してこい、だ？」

「おやおや、そんなことを言っているのですか？あくまでも、あなたを助けたのは『生かすため』ではないのですよ？」

「うち・・・わかった、わかりました、ハア・・・」

「其処まで落ち込むことはないですよ？受けていただく内容は・・・」

イギリスにある、泉が近くにある森の中・・・

「…………ふん！…………」

大柄の男が、拳を振るうと木は呆気なくへし折れる・・・

「相変わらずのお力で…………」

「この程度ができなければ、生を受けた意味がない…………」

「……………」

愕然とする、第三王女…………

また場所が変わり、日本のとある場所。

この原型オリジナルの主人公でもある。

「……………」

普通なら何処にでもいそうな少年だが、彼は一人だ…………

彼らはある意味運命によって集められた者たちである・・・
・・・だがこの人物はあの人かこの人か、どの物語の『主人公』と
いうことはわからない。

序章（後書き）

読んでくださってありがとうございました！！

キャラ設定（前書き）

どんな風にしたらいいか迷いました（笑）

小説って難しいですね・・・

キャラ設定

主人公：ナルカミ成神 ケイタ慶太

性格：温厚であり、困っている者を助ける癖がある。（実際には、短気でありストレスを溜めている）

容姿：黒眼、黒髪の根っからの日本人であるが、それゆえに色で染めたがっている。

能力：推定レベル0（無能力者）システムスキャン因みに能力測定を受けたことはない。聖人でもあり、原典も所持しているという。

口調：一般的なしゃべり方だが、知人には（年上）丁寧語

特徴：主に機械いじりが趣味の高校生、愛称は「けいたまん」本人は嫌がっている

交友関係 学生なら殆どの男子と面識を持っている・・・はず？

トキワダイチユウガク ナガテンジヨウキガクエン
常盤台中学や長点上気学園他多数、
と言うのは学園都市の中での超

キャラ設定（後書き）

少しずつ加えたりします・・・

過去

数年前・・・・・・・・・・

電気店の前、一人の青年、ナルカミケイタ成神慶太がいた・・・

「最近はず総理大臣の退任就任の繰り返し、環境や風評問題が多いな・・・」

彼はまだ8歳前後の身でありながらも、見つめる先にはテレビのニュース画面・・・

「新しく超能力を開発する、学園都市が・・・」

「科学、か・・・大量生産とかしか分かんないな」

勉強は親にとっては良いかもしれないが、子供は非常に嫌なことは言うまでもないであろう・・・

閉鎖空間・・・それに、今時、超能力を信じるものも少ない

「何をしている？さっさと行くぞ」

「ああ・・・」

声を掛けてきたのは、年齢<体格という不等号が使われるような少年、コマバリトク駒場利徳

「下らん、超能力とやらに頼る暇があるのなら自分で足かせをしろ．．．」

「そうだよな．．．今でさえ、これだけ多くの機械に頼っているのにな．．．」

二十一世紀の現代、機械に頼らず生きている人間はまずいないだろう．．．

すると、前方に．．．

「おう、元気か？」

奴がいた．．．

「．．．．．．．．．．．．」

見なかったことにしよう．．．

「ちょっと待てえいいい！！！！！！」

仕方ないから、俺はこう言っちゃった．．．

「くたばれ、浜面」（キリッ）

「キリッ、ってなんだよ酷いな．．．」

しかし．．．

「浜面」(キリッ)

「キリッ、はいいけど・・・こ、駒場」

駒場は、目を輝かせる浜面の肩に手を乗せると・・・

「仕方ない」

「ぐばあ!?!」

トドメを刺してしまった・・・

所変わり、英国のバツキンガム宮殿

広場で激しい、キンッ、キンッ、という金属音と火花が散る・・・

「はあ!」

ナイトリーダー
騎士団長の突きを・・・

「ふん!」

ウィリアムは力尽くで薙ぎ払う・・・

またしても、ガキーン、と猛々しい音が鳴り響く・・・

見たところでは、大分ウィリアムのほうが優勢である・・・

其処で騎士団長の剣が弾かれ宙に舞ったと同時に決着がつく・・・

「其処までです」

『人徳』の第三王女ヴァリアンの声で仕合が終わる、『軍事』は第二王女キャリーサの担当であるんだが・・・

「ふむ、私の勝ちか・・・」

「全く・・・自分は一応、騎士派のトップだというのに、これでは面目が保たれんぞ・・・」

騎士団長とウィリアムは握手を交わす・・・

「いいことですね、好敵手がいることは あと一人も・・・」

「其処は私の位置だあああ!!!!」(怒)

建物のガラスを蹴破って、飛び出してくるので・・・

「お姉様!?!」

「キャリーサ様!?!」

「・・・」

ウィリアム以外の面々は流石に朝から「すごいモンを見た」という顔になっている・・・

過去（後書き）

難しいです・・・

天使の力

「……………ここは？」

光が差し込む部分には、独特のガラスが張ってあることから一種の協会と思わせる風だ・・・

「ひとまず落ち着こう」

よくよく見れば、自分以外にも・・・

「あゝあ、なんで日本人なんか連れてくんだかあゝ」

全身黄色、顔面ピアスという何とも痛々しい人物・・・

「まあ、右方のフィアンマの指示ですから、私は構いませんがねー」
「？」

全身緑色、なんか整った顔の反対とも言える顔の人物・・・

「確かに、この局面においての介入は、いささか不信感を抱く・・・」

青色の服を着た、堅物で体格がよくかなり強そうな人物・・・

「うう……………（此処は？・・・イタリア研修？に来た筈だ、てか俺、何歳だ？）」

カツン、カツンと靴音を響かせて現れた、全身赤色の自力のある人

物・・・

「さてと、ようこそ・・・」

「どこだ此処は？」

前置きを無視して、話しかける・・・

「ここはローマだ、そのくらいはわかんだろ？」

「・・・・・・・・」

後は予測のつかない方向に進んでいく・・・

「俺たち、『神の右席』は本来、マタイ・リースローマ教皇の相談役だ、今も一応その役を担っている」

「ローマ、教皇？そんなお偉いさんの相談役が、何のようだ？」

「ただ単に、力を持つ物に興味があったただけだ」

そんなことで、人さらい？

「あまり賛成できませんがねー」

「どつでもいいんじゃない？」

「・・・・・・・・」

体つきの良い男が一人だけ黙る……

「アックア」

赤色の男性が声を掛けると……

「私は、自分の道を進むだけだ……何者の邪魔をする気も、況してや邪魔をさせる気も無い」

「筋の通った話だな、以前は騎士でもしていたのか？」

「察がいいな……だが私は騎士ではない、用兵崩れのごろつきである」

「傭兵崩れのごろつき、か……」

それでも、強者には違いないと言うことが……

「決まりだな、ヴェント……」

「はいはい……風の象徴の神ウリエルの火、前方のヴェント」

「次は私かねー……土の象徴の神ラファエルの薬、左方のテッラ」

「水の象徴の神ガブリエルの力、後方のアックア」

「次に俺様……、火の象徴の神ミカエルの如き者、右方のフィアンマ」

「（待て……本来、土と風は反対なはずだが）早くしろ……」

契約の象徴の神の代理人外方のプロメツサメタトロン」

「後はどうするんだ、フィアンマ？」

「まあ、後に指示を出す、俺様の命令は絶対だ」

という訳で……

「さてと……とりあえず此処は？」

大きな建物の内部をうろろろする……

「第一の質問ですが、貴方は誰ですか？」

自分の目線には誰もいない……

「どこだ？」（きよろきよろ）

「第一の回答ですが、此方です」

声のするほうを見ると、まだ付け途中の拘束具のようなものを着て、腰には、金づち、鋸……拷問用

のものだと思われるものを身につけて顔を隠した少女が……

「歩くわいせつ罪？」

「第一の質問ですが、金槌とボールはどちらが好みで？」

「……どちらも嫌いです」

「第二の質問ですが、貴方は誰ですか？」

「俺は成神だ、君は？」

「第一の回答ですが、私の名前は………サーシャ
「クロイツェフです」

「サーシャでいいか？」

「第二の回答ですが、別に構いません」

「ならサーシャ、入り口何処だ？」

「は？」

「助かった、ありがとな」(なでなで)

「第一の回答ですが、この程度のことでは暇つぶしにもなりません、後は撫でないで下さい」

軽率だったな、と振り返り・・・

「これは俺の携帯番号だ、何時かお礼をさせてもらっせ」

「だい・・・」

「じゃあな」

鳴神は走り去っていく・・・

「・・・私見一、彼は一体？」

「フッフ・・・サーシャちゃん、いいもの見ちゃった」

「第一の質問ですが、あえて聞かないことにしておきましょう」

「もしかして、サーシャちゃんの初恋の・・・」

「第一の回答ですが、変な創造してんじゃねえ、このくそババア」

金槌で殴るサーシャ・・・

「ぐふっ・・・相変わらず常識外れの破壊力ねえ、サーシャちゃん
んは私の物なんだから」

「・・・」(無視)

これから物語は始まるのであるが・・・

天使の力(後書き)

なんか面白い・・・WWW

作者もいいな・・・

出会い

数年後の夜・・・

さあ、いきなりだが・・・・・・・・・・周りに敵つい兄ちゃんたち、
つておい!!

「何だよこの状況・・・・・・・・」

「最近困るってんだよ・・・・・・・・んな訳で金出せや!!」

などと言って殴ってくる不良・・・

「はあ・・・呆れてものも言えませんが、みたいな？」

「なんだと、ぐばあ!？」（バキッ）

「・・・・・・・・はっ？」

お早い退場で・・・

「全く、学園都市のレベル0は不良ばっかか？」

「てめえ、誰だよ!!」

「カミジヨウトウマ上条当麻だよ・・・・・・・・」

ドカツ、バキツ、ゴスツ……

手を、パンパン、と払い……全員フルボッコ（笑）

「おい、お前大丈夫か？……」

「いや、大丈夫じゃない……」

「俺は上条だ、お前も不幸だな」

「会ったばかりの人間に言われた!？」

ガーン、と落ち込みまくる……

「まあ、気にすんな……にしても、今日は不幸だああ……」

「あ？それより……後から鬼のような形相で迫ってくる女性は誰だ……」

「（アンタは……）」（怒り）

若干退く……

「げ……御坂美琴^{ヒトリビシ}!」（ピューン）

凄い速さで去っていく……上条当麻さん？……

「……」

ブツブツ呟いて歩いていく、途中に白髪の少年を見かけたが気にすることでもないのだ

そのまま移動、家と思われる場所マンションに着くと・・・

「おい、誰が開けたんだよ・・・はぁ」（ガチャ）

ピッキングをした後がある・・・

「!?!」

「・・・・・・・・」

「人の家で何してんだよ!? 其処の二人」

「うるしゃい!!」（モグモグ）

「おい、金髪のおっさん!!」

コイツは・・・とりあえず殴る

「まあ、構うな」（ゴクゴク）

「お前も・・・もはや、何も言っまい」

「見掛け変わりすぎだろ・・・」

何だよ、何なんだよ、何なんですか!!、と頭を抱え込む自分・・・

「はぁ・・・」(コポコポ)

「お前は、相変わらず旅行か？」

「それは無いな、多分・・・俺は入学してから、一回として学校には通ってはいない」ベンキョウデキナイヨ、ハツハツハ」

「まあお前も大変だな・・・」

「駒場もだろ？」

「けっ・・・成神の癖に」

「ふっ、違くない」

互いに笑う・・・

その後、駒場と浜面を追い返した後で・・・

「ふー・・・」

一息つく・・・外では雷が起こっている、雷?・・・

「大方、超能力者が暴れてるんだろな」

寝床に入る、プルル、・・・

「非通知？・・・はい、もしもし」

「第一の回答でs」

ガチャ・・・プルル・・・

「き、気のせいだ・・・まさかの、いたずら電話!?!?・・・
もしもし」

サーシャ「オイ・・・」

「・・・」

・・・

「あの〜、誰でしたっけ？」

サーシャ「スウー、スウー・・・」

相手側から寝息が聞こえる・・・

「アレから、もう何年だろうか……」

ひよんなな出会いも偶には悪くないと思っただけであつた・・・

出会い（後書き）

とりあえず、アニメの第零話ゼロから考えて見ました

感想などよろしくお願いします！！

悪友

ミン、ミンミンミンミン、ミン……

「……………暑いよ……………」

ムワァ、という暑苦しい風が自室を吹き抜ける……

「冷蔵庫は（ガチャ）なんとか無事か……………」

時期は、真夏ともいえる7月下旬……………先日の雷の影響で、冷房機が停止……………

「暑いぜ……………」

成神「もはや、暑いとしかいえない……………ブルルル……………ガチャ

「もすもす?」

「おお、慶太のケータイが通じるとは今日は雨が降るじゃんよ」
（笑）

よーみかーわーとどす黒いものを放出している成神はすぐさま、センターキーの右下を押した。俗にいうアレだ、迷惑電話防止術。

「……………ピ、ツーッー」

で、電話を切ると……………

「慶太、いるじゃんよ?」(ドンドン)

「ば、バカな……」(泣)

しぶしぶ部屋の鍵を開け、ない(笑)……

「帰るかな?」

「慶太」(ドンドン)

こ、コイツしつこい、と口に出すと。今声聞こえたじゃん?と返事が返ってきた、恐るべし。

〜1時間〜

「け、慶太、開けるじゃん、よ……」

「キモツ!? 体育会系はダレルとキモツ!」

鍵をあける。流石の警備員アンチスキルも暑さには負けた……

「慶太、居るじゃん……」

「わかってなかったんかい!??……まあ、どうぞ」(麦茶を出す)

「(ゴクゴク)プハー、生き返るじゃん!」

「女性が言うことですか?」

「遠回しにバカにしてるじゃんよね?」

「気のせいです、用件は?」

「学校に来るじゃん?」

「俺は知らねえじゃん」

.....

「いや」「くるじゃん」(黒笑).....

黄泉川愛穂先生、恐るべし.....

「何故なんだ.....」(パタパタ)

この成神^{バカ}は扇子を扇いでいる、科学の町には似合わない.....

「暑い.....」

ふと、上を見上げると.....

「?????薄らと黒服の長身の赤髪の男と.....長髪の、ジーンズチヨキチヨキ魔?ぐわあ、目が目があああアア!?!」

いや乾いただけだからね?そして、視線の先は.....

「学生寮の・・・布団？」

真っ白な塊が一つだけぶら下がっている、最早どうでもいいので学校へ行く・・・

「おやー、珍しいと違うんかい？」

「黙れ、女好き青髪・・・」

「酷い、酷すぎるよ、カミちゃんやなくて・・・けいたマン」

「はいはい、一生コロンブスの卵でもしとけ」

コロンブスの卵（卵の先端が細い方を使って卵を立たせる）・・・
悪戯だ。

「いいんないか〜、小萌先生と一緒にやるなんて」

「にゃ〜、珍しい奴が居るじゃないかにゃ〜」

「サングラスをたたき割るぞ、コラ！！」

「上等だぜい」

ふぁいていんぐぼーずを取る猫語のチキ御門きゅん。

「まあまあ、土御門君も、鳴神くんも落ち着いて」（笑）

「青髪、コイツは「すごいパンチ」ギャフ!?!」

どこの超能力者バカ根性のようにはいかない、ふつーうの殴り。

「ふ、フフフ・・・待てやコラァ!?!」(走)

「待つかよ」(走)

あっという間に学校到着・・・

「まだ、カミちゃんは来てないみたいだぜい」

「女の子はぎよ・・・さんおるのにな」

「マジかにや〜」

「眼つぶし」

「ぎよわ!!目が目がああアアア!?!」「おべえ!!アカー
ーーン!?!?」

夏は始まったばかりだ・・・

悪友（後書き）

どうでしたか？おもしろかったら感想を（m・l・m）

幸運不運

タタタタタ……

30度前後の太陽がじりじりと照りつける炎天下の中、成神は黄泉スタミナアップ川の体力強化を受けて

いた……

「成神、ラスト走るじゃんよ!!」

「あの教師、殺すきか……」(ダラダラ)

「何か言っただじゃん？」(黒笑)

「え……くそう!!」(ダッ)

ヨミカワキキョウ鬼畜、と心の中で言っただる……

「相変わらず、あの先生絞ってんな」

「仕方ないだろ、先生兼警備員だしアンチスキル(笑)」

「おい、其処の生徒も一緒にやるじゃん？」

当然、そんな奴はいなく……

「逃げるぞ!!」(ダッ)

「おう!!」(ダツ)

流石は先生、強・・・

「つたく、あと三周じゃん!!」

「増えた!?!」

地獄徒競走を終えた次に、今度は学園都市の中で一際どす黒いようなオーラの発信

源を見つけ・・・

「おや?あの不幸オーラ発しているウニ頭野郎は・・・」

前方に、カミジヨウトウムス不幸発見!!と目を光らせて、勢いをつけて蹴飛ばす構えをする・・・

「チエストー!!」

「はい?いきなりなんのご用でせグベラバツ!?!」(メキメキ)

ピューンと、軽く3メートル吹き飛ばす・・・

「いてて、不幸だ・・・うん?」

「やっと見つけた!!」

そこに、一際活発そうなオーラを持った人物が現れ・・・

「げ・・・御坂美琴ミサカミコト・・・」

「だ〜から〜、私には御坂美琴ミサカミコトって言う名前があんのよ!!」

「で、ビリビリ中学生は何のご用でせうか?」

二人のメイン空間&成神を含めたモブ空間・・・

「(・・・)」

蹴り飛ばした本人が萱の外である、しかもなんか警備ロボットこっちに来るし二人は逃

げていくし・・・

「不幸だ・・・」

と台詞をパクっていると・・・

「おー、何してんだ〜?」

金髪で茶色のジャージ?両手にはスーパーのビニール袋をぶら下げた、浜面仕上げ

ことパシリ・・・

「なんとなく息抜きだ、んじゃ帰るわ」

「俺の姿を確認したからとか？（笑）・・・っていねえし!？」

まあ、浜面自身も話があるようではなかったらしいので追っては来なかつた・・・

「おっと」「ドンッ（

「・・・」

「?」

気のせいか？今誰かと・・・

「ま、いいか・・・」

人口が多ければこういう事もあるだろうと思い、その場を去る・・・

『生徒の皆さんは完全下校時刻を過ぎています、急いで帰宅しまし
』よ

と、学園都市全体に聞こえるであろう放送が流れる・・・

ヒュルルルルル・・・

「この効果音は・・・」

アニメ番組でありそうなありふれた効果音を聞きながら、上を見上げると全長2メートル

ルの黒の塊が降ってきていたことに気づいたが突然すぎて避けれず
に・・・

「ぐひゃ!?!」

と潰される・・・

「いつて・・・」

「だらっしゃー!?!?!?!」

「!?!?!」

いきなり力任せに飛び起きる、上に乗っかっていた人物は自分に気づいていなかった

ようなので、びくりと肩を振るわせる・・・

「おいおい、いきなりなんだよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

赤毛に煙草に黒の修道服？・・・

「失礼したね、僕の名前はステイル」マグヌス、しがない神父さ」

「今時の神父は上から降ってくるのか？」

神父も^{ブローバル}発達か？・・・

「まあ、気にしないでくれたまえ（コイツはさっきの・・・・・・・・）
」

「どうした、自称神父？体を痛めたのか？」

「いや、何でもなし自称ではなく本物だよ」

そういつて、足早に立ち去る・・・立ち去る・・・立ち去る、
だと？・・・

「え・・・詫びもなし？」

疑問点はそつちか！！・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その状況を見ている女性が一人・・・

新たな出会は^{ラッキーアンラッキー}幸か不幸か・・・

幸運不運(後書き)

ふう
・
・
・
・
)
>
<
(

夏休み

自称神父との出会いから・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やべーよあ、と独り言をつぶやきながら付けられていることに気づく。

「怪しい奴であえであえー！！」

と時代劇の悪人もとい成神は大声を上げる。

「なっ！？どこかに伏兵が？こうなっては・・・はっ」

そこでようやく我に返るジーンズチヨキチヨキ魔。

「気づいてしまいましたか・・・」

「いや気づきますよ・・・」

あの時のジーンズチヨキチヨキ魔か、とちよつと残念。えっ？何を期待してたかって？そりゃ、えーりあん。

「私の名前は神裂^{カンザキ}火織^{カオリ}訳有って、一緒に来ていただきたい」

そう俯きながら成神を確認しようとする、当の本人は敵前逃亡。

「え、ちよちよつと待ちなさい!！」

「うぜえ・・・」

「待ちなさいと言っているでしょうが!！」

ふと辺りを見渡すと、誰もいない・・・

「フフツ、人離れのルーン、ステイルですか・・・」

「なんだよこれ、てかフフツてなんだよキメーな・・・」

「そのツンツンに同じく」

「っ、私はまだ十八です!!!!!!!!!!!!!!」

本当に偶然だろうか?・・・

「上条当麻並びに鳴神慶太、貴方達にお話を聞いていただきたい」

成神と上条はコクンと頷くと神裂に対して。

「「キメー」」

「止めると言ってるんだろぅがア!!」

本気になる神裂さんにツンツン上条君はある質問をぶつけてみた。

「いったい何なんだよ、アンタも魔術師か？」

「ええ・・・必要悪の協会所属の魔術師です」

「アンタ達は何で禁書目録を追い回す、同じ仲間だろ!!」

「彼女は何も覚えていないんです!!」

その熱く燃え上がる会話に入れない人物が一人。

「(――;)・・・(話の内容が)」

成神だった(笑)ここからはハイペースでこの成神さんがお伝えしまーす 神裂さんとかいう人は?いきなり「七閃」とか言って渋いワイヤー攻撃してくるし、そうかと思ったらいきなりキレるし、上条は逆上してその拳を振りかざすも・・・向かい打ちにされてやんの(笑)

てか俺は無視されるし・・・不幸だ。

「はあ、帰っていいか？」

「貴方は私や自称神父スタイルが魔術師ということを知っています、なので記憶を消させてもらいます」

そう言うと急に鞘を振り上げ襲ってきたところにはさすがに。

「もしかして秘伝の殴り消し!？」

「違います、首ちょんぱです」

「おぶへえ!??それって首と胴体はなれてるよ?」

「いや、だから違つと・・・」

そんな井戸端会議みたいな口げんかと暗闇の中から、燃えるような赤髪の大男のステイルが『誰もいないはずの空間』から煙のように出てきた。

「神裂、時間だよ」

「えっ、まだ三分も・・・」

「僕のルーンはカップラーメンじゃないよ!!! ったく、神裂がおかしくなってしまうね」

そしてそのまま神裂と共に闇に向かって歩き出すと一言・・・

「君は一体何者なんだい?」

ステイル自身が投げた煙草が燃え尽きると、周りが動き出す・・・

「哀れな子羊、かな」

夏休み（後書き）

取り敢えず、終了！

次回もこつこつ期待しないでいいですよ（笑）

禁書目録(前書き)

編集 中 1 2 月 1 5 日 現在

禁書目録

イタリア……

何故夏休み初っ端から、こんな所に居るかというと……

「……いや、分からなくもないが何故に文通？」

この大柄の男アックアが送ってきたのは青い便箋の入ったカックイイ手紙だ。しかも裏に星まで付いているというオマケつきだ。

「私が書いたのだが、何か到らぬ点でもあつただらうか？」

そこにさっきまで術式？の調整をしていた黄色のモチーフなヴェントはというと。

「うわっ、キモー！？何？ガチホモなのアックアって？」

「黙れヴェント」

今度は晚餐をするのかとでも言いたいほどの葡萄酒とパンを抱えたキモ緑のテッラはというと。

「それにしても、私はローマ信者意外は嫌いなんですわー、アナタ成神はどうなんです？」

「金属を擦り減らすような言葉でしゃべんな」

「……反抗期ですか？……アックアが二人いる様に思えて嫌で

すねー」

キリキリと耳につくような音で笑い始めるテツラ、それに不満を抱いたアツクアは何の表情も見せずに。

「不躰な解答だが、貴様のような奴に言われたくはない」

「……いいますねー」

頭にきたような口ぶりのテツラはパツと右手に何処からともなく、白い粉を出す。

「ほうテツラ、貴様程度が私に勝てるだけでも？」

アツクア自身もそう言いつつ、撲殺用の棍棒メイスらしきを何処から持ってきたのか担いで……当たってる！！本棚に当たってるから！？

「おい、ヴェント何時もこうなのか？」

相変わらず顔面ピアスで鈍く銀色に光る十字架口から垂らして本を読んでいる……

「ナンアンデスカア？アンタら騒ぐなら魔術結社マジックキャバルでも潰してくれヴァあ？」

そんな纏まりの無い虎マシユシユの子どものリーダーは軽くカップを右手で砕く、当然手からは血が『出ない』

「うぜエなデメエラア……」

「おやおや、フィアンマも出てきましたし矛を納めるとしますかねー」

「フンッ」

「チツ、殺る気がないなら最初から騒ぐな、肉片になってから回収なんざ御免だ」

その後、フィアンマ以外の三人は用事があるとかどうとかで散らばった。その時だった、ゴウツ！！と何かを中心にして波紋のように広がる魔力の渦。

「これは、イギリスで感じたときの魔力よりも大きいな・・・」

窓から覗いてみると髪の毛一本サイズの白い光が天に向かって伸びた、一瞬のことでもよく分からなかったが宇宙^{ソラ}では光が瞬いていた。

「ほう・・・トドラゴンブレス竜王殺息じゃないか、伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同意しても可笑しくはないだろウなア」

そんな伝説級の魔術を自分自身も、それはさておき。

「へえ、その発信源はなんだ？」

「禁書目録、俺たちが世界を救うために必要不可欠なものだ、お前にイギリスに行かせた時に探らした資料の一つだよ」

「禁書目録、そんなものもあつたけか？懐かしいな『王女』が」

「そんな魔術大国で頭の中に10万3000冊何て馬鹿げた物を打

ち込んだ生きた、物だよ」
「ニゲン」

確かにいくつかの『物』は盗み取ったが『者』にまで手を出すつもりは無いがな、と成神はドアノブを捻った。フィアンマとすぐ離れた後、何故か・・・塊にぶつかった。

「きゃっ!?!」

「大丈夫か?」

その塊に小さい少女が周辺目掛けて派手に硬貨をぶちまけた、ほんの微かに何かを『感じた』

「あう、すみませんすみません」

ブンブンと頭が千切れるぞ位の勢いで頭を下げてくる少女。

「とりあえず・・・拾うか?」

「は、はひ!?!」

その効果はいたってシンプルな銅貨などのものが多かった。

「ありがとうございます!?!」

「いや別に・・・」

「わ、私は『シスターアンジェレネ早くしなさい』は、はひ!?!」

突如聞こえた呼び声に大慌てで立ち去ってしまう・・・

「『天真爛漫』といったところか」

まだ秘密がありそうだ・・・

禁書目録（後書き）

やれやれ、学校なんて嫌だ・・・

感想をよろしくお願いします

魔術師？

『過去』にとらわれているつもりはないがおいおい、神の右席ってのは呼びつけては返す何ぞ質の悪い詐欺と同じじゃね？この無限ループが続くと考えたく無いもんだ・・・

「はあ・・・」

一端、自動販売機（自動販売機）に手をついて、目の前を見てみると。

「はメキヨリッチ！？」（ミシッ）

溜息をしようとして『はあ・・・』と言いたかったのにその言葉は誰かの蹴りと眼前に広がる学園都市の名門である、常盤台（常盤台）によって言葉にならない叫びが出る。

「・・・」

なにこのやっちまったみたいな状況は！！

「上条さんは知らねえ！！」

「ちょ！？待ちなさいよ！！」

そんな二人の背中を見送るはずも無く・・・
ふらふら立ち上がって。

「マテやしらあー！！！！」

「復活早い!？」

「なんなのよ、コイツどこぞのバカみたいじゃないの!?!」

突然立ち止まった上条は。

上条「上条さんは悪くないでせう?」

御坂「……………疑問形?」

拳をぐつと握り……

鳴神「歯!、食い縛れ」

上条「ふ、ふこびブルチ!？」

いい天気空に一人の少年がバチコーンと飛んだ、あいきやんふら
い。

「不幸だ……」

「ああん?」

「すみませんでしたー!?!?!」

土下座なんて男の恥だな、と上から見下ろして感傷に浸っている。

「この世には謝って済む物と謝っても済まない物があるんだ、わかるか？」

「な、なんでせうか？その『おまえは悪いことをした』と突き付けるような現実には」

「よし、ブ・チ・コ・ロ・ス」

こんな状況なので、御坂さんとかいう人は帰ったらしい・・・

御坂さん曰く「私は悪くない」だそうだ・・・いやいや、絶対主犯メインディッシュだろ。

「とーま〜」

インデックス「禁書目録さん！？何で此処にいるんでせうか？」

「とーまが心配だったんだよ」（ガバッ）

じとーーーーー、と視線を送る。

「はっ！お前なんか変な視線を送ってただろ？」

「気のせいだ」

「じとー』はい、気持ち悪いからコツチ見んな』酷っ！？」

すると、違和感に気づいた・・・車の音も鳥の鳴き声も人間が行きかう音も聞こえない、ただただ『ノットサウンドス静寂』である・・・

「なんで、そっちの君までいるんだろっね？」

「魔術師……」

「捨て犬か……」

「失敬な！！捨て犬ではなくステイルだ！！二人揃って、人の名前を覚えられないとは君たちの脳はサル以下かい？」

鳴神と上条は顔を見合せて……

「お前（捨て犬）だけには言われたくない」

こめかみをピクピクと震えさせながら自称ステイルは。

「本当にムカつく餓鬼だ……」

その後の話を伺つと、何やら魔術師が学園都市のある場所に潜伏しているらしい……

「だから、上の命令で君を連れに来たんだ」

「不幸だ……」

四肢をついて頂垂れる、上条さんの背をヒラヒラと。

「がんばれよ〜」

「じっぺうえ！???それだけなの!??」

「君も『魔術』『魔術』なんて軽々しく口にするのはよしてくれ、
何だかアノ女狐が浮かんで仕方ない」

「女狐？」

「クシュン、ヘックション・・・誰か私の噂でもしているのであり
けるかしら？」

魔術師？（後書き）

とりあえず完成！！おもしろいかわかりませんがこれからもよろしく！！

過程

唐突だが、俺が神の右席に入った頃の話しようか。その当時は学園都市も『完全』とはいえど出来てはいなかった。それよりも、『どの力』を『どういう具合』に『どこに配置』をするか様々な面で悩んでいったところに俺が加わったのだ。

「使える駒は出し惜しみする必要なんかねえ」

と言われ、よく分からないまま……ある場所に忍び込んだものだ。というか、アレは忍び込んだと言うより紛れ込んだと言うほうが正解であろう。

「コレとその辺りのモンと後はコレを持って行け」

「なんだ？皮膚かよコレ……荷物多いな」

「何寝ぼけてやがんだ？」

「お前は卓上の駒なんだ、予定通りに動いてもらわないとコチラが困る」

「ウエー、あの異分子を本当に使うつもりだったんですか？ねー、右

方のフィアンマ?」

「俺の参謀に問題があんのか?」

「いえいえー、別に問題というほどのことでもありませんでしょうからねー」

「それより、あの『傭兵』も中々滑稽なものでありそうだ・・・」

『起きろー、何時までこの私をコケにしてりや気が済むんだしー』

「!!!!!!」

ハツと眼が覚める。夢か、夢なんて覚えているのも久しぶりか。とただ口を溢す『現在』はそれほどまでつまらなくなった。夢の中で言っていた言葉が思い出される。

「思い通り、か・・・」

自宅のベランダから、青空を見上げて呟く・・・

「ん?」

視線を下ろすと・・・

鳴神「騎士か・・・本当に懐かしい」

ポツポツ見える銀色の輝き、そして自宅の近くを通り過ぎる人影。

「これはまた面白い人物が紛れ込んでいたものだよ・・・」

その『人物』は誰ともいえない、最早人間と言う名のカテゴリーそのものからかけ離れているのだ。

だが例えるなら『人間』以外には考えられない

「工作兵、といったところか。まあ、そんな事はどうでもいい・・・彼のうちに秘めているものが実に興味深い」

「私からコンタクトを取るなど『貴方』意外にはいないと思っていましたかね」

無感情なその人物は本当に誰なのか。

過程（後書き）

お腹が・・・（ ・ ）とりあえず久方ぶりの更新！！

UNKNOWN

「（ガブツ）」

「不幸だあー！！」

と言っている人物がいると同時に・・・

「初めましてかな、成神慶太君」

「どちら様ですか？」

落ち着いた口調で答える・・・

「私は・・・学園都市統括理事会の理事長だよ」

「で、その理事長さんが俺の携帯に電話して何のようですか？」

「ふむ、実は君に提案があるんだよ」

「提案？それはまた、唐突な・・・」

「別に断ってもらっても構わないよ、内容は幻想殺しをの観察だよ」

「生憎、人の事まで手が回る余裕は無いんでね」

ガチャ・・・・・・・・

「彼はなかなか面白い、もう少し話をしたかったがね・・・」

一人、誰もいないその場所で淡々と述べる・・・

其処にあるモニターには絶対能力進化と書かれているのは本人しか
知らない・・・
レベル6ソフト

一方、成神本人は・・・

「（一体何なんだ、まるで誰もいない空間に向かって話しかけてい
るみたいだ・・・言葉に表すと）否、言葉に表せないな」

と、見えない恐怖に駆られていた・・・

「ふう・・・」（バシヤバシヤ）

顔を洗う・・・ピンポンと音がしたので玄関に近づいて外を覗くと・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

「けいたまーん、勉強教えに貰いにきたで〜」

「分かんないからな、オイ・・・」

日常的に何かしらの交流はある・・・

すると家の電話が、プルルル・・・

「はい鳴神です?」

「あー、鳴神ちゃんですか?そつちに「先生!?僕なら此処に〜」
・・・・・・・・」

「誰だよ・・・」

電話に出るのはいいが、腰をくねくねさせんな・・・

「けいたまん、ごめんな・・・今から愛しの小萌先生に教えに貰いに行くわ〜」

「なんだその、申し訳ない気持ちか籠ってるのか籠ってないのか分からない言動は・・・」

「小さいことは気にしちゃ、アカンで〜」

小さいことなのかよ・・・なぜか電話の相手が変わり・・・

「鳴神、勉強ははかどってるじゃんか？」

「え・・・」

「え、じゃないじゃんよ！！お前はだk」（ガチャ）

「ふう・・・」

学校・・・

「どうしたんですか？黄泉川先生？」

「アイツ切りやがったじゃんよ」

「まあ、落ち着いてくださいなのです」

「よし、アイツの感心意欲態度はC、とこれでフフッ・・・」

「黄泉川先生！？成神ちゃんの良い子なのですよ」

いやいや、不登校が真面目とかな問題じゃなくて・・・まさか、教師がこんなことをするなんて・・・

その夜・・・

ズガガガ・・・

「むう・・・何だこんな時間に・・・」

起きて見ようとする・・・シーン・・・

「何だよ、ふわぁ〜眠い・・・」

布団にうずくまる・・・

とんでもない事が起きているとも知らず・・・

UNKNOWN (後書き)

何が良くて何がいけないかが最近分からないです・・・

最強の能力

時刻は夕方・・・

路地裏では、学園都市の最強とも言える超能力者^{レベル5}、その中の一人・・・

「すごいパンチ」

「ギャフ!?!」

「そんな馬鹿な俺たち『只の不良』の組織が「すごいパンチ」ピブルチ!?!」

総勢約100人前後のスキルアウトではない不良を伸している人物・・・

「根性が足りんぞ、根性が!!この俺、削板軍覇^{ナンバーセブン}を少しは見習いなさい!!」

お母さんですか?そのとき、心は一致したはずだ・・・

「む?アレは・・・」

前方の歩道を過ぎていく人影を見て・・・

「心の友よー!!」

「・・・削板^{コシツボウ}か・・・」

クルツと、後ろを向こうとすると目の前に顔・・・

「だらっしやー！ー！！」

削板には悪いが全力でいかせて貰った。

「そげぶ！？」

結果、その全力を受けた削板はスケート選手もビックリの五回転ジャンプをやつてのけた。

現在進行形で横を歩いているのは、学園都市の超能力者^{レベル5}で第7位^{ナンバーセブン}と削板軍覇である・・・能力は『念動砲弾^{アタッククラッシュ}』未だに謎の能力らしい・・・

「ふっ、ナイスな蹴りだぜ！！」

顔に大きな絆創膏を貼っている・・・

「そうかい・・・」

「ま、根性が有れば効かないがな！！ふっふっふ」

と意味が分からず、その後、削板とは分かれて・・・

「(ドンッ)ん？」

「すみませんと、ミサカは申し訳無さそうに言ってみます」

「この間の主犯メイソウ……」

「はい？とミサカは不思議そうに問いかけてみます」

その時、近くのコンテナの置き場から爆発音らしきものが聞こえた。
・
・

「あれか、昨日騒いでいた奴は……」

「そっちに行つてはいけませんと、ミサカは貴方の進路に立ちます」

と御坂妹が成神が居るであろう場所を見たときには……

「え……？とミサカは驚きの余り呟きます」

「歯を食いしばれよ最強、俺の最弱はチツとばかり響くぜ……！」

「ガッ!!?.....」

という感じな場面を見て、気絶しているであろう白髪を病院まで運ぶ.....

「珍しい彼が病院に運ばれてくるなんて、君は誰なんだい？」

「さあ?」

「まあ、困ったときは此処セラにおいて治療はしてあげるから、冥土返ヘンキヤンしと呼ばれている僕が。」

「そうしますよ怪我をしたら.....そういや、あの白髪は誰なんですか?」

「学園都市最強と詠われている、一方通行アクセラレータだよ」

「学園都市最強は、一統括理事長ではないんですか?」

「.....君も彼に会ったのかい?」

暫しの沈黙.....

「まあ、それなりに」

「そうかい.....」

「一体何者なんですか?」

「長い付き合いの僕にも分らないよ・・・」

病院からの帰り道・・・

「アレが学園都市最強の学生か・・・」

強さの上に成り立つものは何であろうか？

最強の能力（後書き）

今回は、どうしようか迷いましたね・・・

感想をよろしく・・・

炎の魔術師

とある、学生も人だかりの居ないカフェで、二人の男が熱気を放ちながら話している……

ゴウンゴウンと御使墮しエンゼルフォール発動中の、電気がピリピリ、皆がイライラ、それくらいムンムンする蒸し暑さであるが、今にも大量虐殺でも起こりそうな感じ……

「で？ 用件は？」

ふと、私こと成神さんは目の前に「何コイツ、見ただけで暑さの発信源ですよ？」といった全身黒服、真つ赤な髪、くわえ煙草……簡単に解説すると、人間と言うのは視覚での判断や経験での判断を最優先するため『髪の毛の、赤色』火』熱い、黒というのは世間では熱を吸収しやすいとも言われている&手の甲まで届くような長袖＋スキーバコに行く様な厚生地、そして人類が生み出したもつとも地球温暖化増進材……』全部口に出ていますよ、はい……

「君は僕に対して罵倒をして、面白いのかな……」

今にも、煙草を、ブチツ、と噛みちぎって掴みかかってきそうな神ステ
イルマクス

父さん

「生憎、そんな男を弄って楽しむような、気味の悪い趣味は持ち合わせてはいないんでね・・・」

実際のところ楽しんでる訳ではないが、煙草が小刻みに揺れているのが楽しい、え？それこそ悪戯だつて？私の辞書に『悪戯』イタズラという文字は無い！！by成神

「じゃあ、聞くけど・・・さっきからこっちを凝視している店員さんに何を吹き込んだ！！」

其処で俺は・・・

「麦茶、二人前」

即答・・・

カフェ正式名称は『カフェテラス？』言うかは知らないが・・・外国系の雰囲気ポンプンの所で麦茶と言う、日本文化の飲み物と『分ま』ではなく『前まへ』という歴史物語暴れん坊でてきそうな言葉使い、あからさまに「お前は何時の時代の人間だ？」等と・・・

「あー、君を頼った僕が馬鹿だったみたいだね・・・」

と心底呆れられてしまう・・・

「好きに言ってる・・・」

「はあ兎に角、パワードスーツ駆動鎧と言って学園都市側ははあくまでも防御用にと言っているみたいだけど、一部では科学側の人間が回収して外に売り払おうとしているみたいだよ？」

「つまり要点はそれを潰すのか？」

大胆兼簡潔にまとめてみるが、ステイルは煙草を口から外しながらも首を横に振り・・・

「いや、所持している人間もしくは生物を殺す・・・のは僕の仕事かな？」

サラッ、とごく自然に当たり前のように言っただけ・・・其処である点に気づく

「人間もしくは『生物』？」

そう！！人間なら誰しもが分かると思うが？だってそこ等辺にウジヤウジヤ居るし・・・

「不思議なのかい？君は一応科学側に身を置いている身として知っているだろう、人工生命体クローンと言う生き物の他にもパワードスーツ駆動鎧、科学ならではの量産技術コピー」

「人工生命体クローンか確か、人の遺伝子DNAを使って同じ物を大量に作り出すことが出来るらしいな・・・だが、あくまでも仮説だ・・・実際には世界共通の法律レギュラーに基づいて禁止されている実験だと思うが？」

一般論《常識》で話を続けようとする・・・

「法律レギュラーも犯罪イレギュラーなんて物も生ぬるい、此処学園都市を仕切っているのが誰だか忘れたのかい？」

「アレイスター・クロウリー総括理事長」

人間なんて言葉から最も遠いかもしれない『人間』

「だから今回は僕たち『魔術師』の出番だと言う訳だ、詳しくは知らないが此処《学園都市》も武力行使をすれば簡単に片付くみたいだけど、穏便に済ませないといけない理由があるらしいよ」

という訳で、カラン、と氷の溶けた麦茶が運ばれてくる前に颯爽とその場を立ち去る・・・お勘定は英国イギリスに支払わせるらしい定価120円の麦茶二人前分を・・・

ピチャン、雫が垂れ落ちて、いかにも臭いが在って誰も近寄りそうの無い工場には異様な雰囲気オーラを放つ男性を含めた複数の男性と一人

の女性？・・・

「アヒヤ、ミサカの方が必用なのかなーん？」

一人の『女の子』・・・

「おいおい、こんな奴に任せていいのかよ？どうせならもっと人材マネジ派遣メイトとかに・・・」

パン、と乾いた音と、グチャリ、という気味悪い肉の弾ける音は、複数の男性の内一人の命を刈り取った為その言葉の後は続かなかった・・・

「拳銃の方が、まだ死に甲斐がある・・・」

拳銃独特の焼けた火薬の臭いは一切せず、細くて繊細を併せ持ちシンプルで無限に・・・鉄切れを飛ばす・・・

誰かが何処かで、不幸だあ！？、と叫んでいるのも知れず・・・

炎の魔術師（後書き）

よくはわかりませんがこんな感じでしょうか？

科学の力

時刻は日の入りが始まる夕刻、少し風が、スー、スー、して気持ちいい時・・・

現在、自分たちは学園都市外周部の一角に佇んでいる敵の本拠だと『确实』に思える場所、ん？何で分かるかって？そりゃあズラズラと『黒のワンボックスカー×10』が並んでいて、現に見張りがウロチヨロしてるし・・・

「で、作戦は如何するんだい？」

「え？そついうのは此処で決めるもんじゃ無いだろ？」

・・・・・・、ヒュー、と虚しく風が吹き抜けてしばしの沈黙・・・

「スー、ふー・・・」

と呑気に煙草に火をつけて蒸かしている・・・

「あんまり僕が言うのもなんだけどね・・・」

「なんだよ？」

「君、一回死んだほうがいいよ？」

そこで、グワシッ！！、とステイルを物陰から蹴り出す・・・案の定、見張りには見つかりオマケに信号弾まで使われるというが、ステイル本人は腰を摩りながら・・・

「別に信号弾を使わなくても・・・」

目を、キツ、と尖らせつつ、煙草を投げ捨てる・・・

「僕が真っ赤にしてあげるのに・・・」

煙草は一瞬にして莫大な炎となり、その、ゴウゴウ、と夏の夕方を熱くする炎はステイルの掌に集まると・・・

「炎よ、巨人に苦痛の贈り物お！！」

瞬間的に一箇所に集中させて打ち出すと、見張り諸共ワンボックスカーを吹き飛ばし、ズガシャン、と爆発させる・・・

「こっちは何でも良いから、とっとと目的の物を潰して来い！！」

「二人居るって、ばらすなよー！！」

物陰から、ヒョッコリ、顔を出して憤慨する・・・言つまでもないが、転がっていた一人の男が無線機を取り出し・・・

「敵戦力は二人、その内一人は発火能力パイロキネシスを使う模様！！」

「悪いけど学園都市が使う、そんなチンケな炎ではないよ！！」

「駄目だ、あの馬鹿ステイルは放つて置こう・・・」

と言っている暇も無く、敵さんは何かゴツツイ物を出してきた・・・炎で光る銀色のアーマー、不恰好ながらも装備されたと思われる機ガトリンケ

関銃、それが一体や二体ではなく数十体といる・・・

「パワードスーツ
駆動鎧？」

「あれは、目的の物と違う！！いいから行け！！」

と馬鹿の怒号に背中を押されつつ、その場を立ち去る・・・

全長が幅広い工場の中には男達の影も無く、ただ忽然と目的の其れが置いてある『破壊された状態』で・・・

「・・・・・・・・・・」

眉間にシワを寄せ、怪訝な顔をしてしまう・・・

「あつはつは、驚いた？驚いたよね」

耳を劈くような黄色のハイトーンの声の主は、鉄骨が連なる柱の陰から出てきた・・・

「そつだ、自己紹介かな？私は、ミサカファースト零番個体と言っとくけど、シスターズ妹達のミサカ00000号じゃないから」

「いや、知らないし」

高速で手をパーに近い状態を、ブンブン、と振りながら応答する・・・

「ぶーぶー」

(ー3ー)、こんな顔をされても困るのは俺鳴神である……

「取り敢えず、目的物タイゲットは確認できたし帰るか……」

クルツ、と方向転換をしたのと同時に、ズシャ、と肩に鈍い痛みが走る……

「あひゃひゃ、命中」

等と喜んでいるにも拘らず、俺は肩に刺さっている物を抜こうとするが……

「グッ!? (抜けない?)」

よくよく見て見ると、其れは工場では珍しくも何とも無い、只の鉄の棒である……しかも、錆付いているため、ザラザラ、とした感触があるがそんな事より、その零番個体ミサカファーストを観察して……

「(かなり痛むが……待て、待てよ、今この状態で電気なんか流されたら)」

「お次は、とっておきの……」

零番個体ミサカファーストの周りを、バチバチ、と青白い物が駆け巡る……

「周りは金属、自分にも金属……しかも金属は電気を通しやすい・

・・・」

現在の状況を解析する、自分の立っている立場・・・

「電撃だよ（笑）アンタをとっと殺して早く何処か行きたいよ、という訳で死ね」

そして電撃は工場内を朝だと感じさせるほどの眩しい光を放つ・・・

ズドン、とまた一機、パワードスーツ駆動鎧が破壊される・・・

工場外では、至る所にルーンのカードが貼られ・・・

「その名は炎、その役は剣、顕現せよ！！わが身を砕いて力と成せ、インケンテイウス魔女狩りの王！！」

その言葉と同時に、グワァー、と雄たけびを上げながら現われる、インケンテイウス魔女狩りの王・・・当然、パイロキネシスト発火能力者とだと思っていた科学側の人間は、それに跡形も無く焼き殺される、其れに加えステイル術者本人による・・・

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字ー！！」

それで三、四機が軽く弾け飛び、その爆発に二、三機が巻き込まれる・・・

「これは、玩具の兵隊なんだろうか？」

「馬鹿な、あんな物が科学・・・はっ、魔術か!！」

今更気づいてももう遅いが、自分たちは数があると思っっている科学側の人間は・・・

「数で潰せ!! 相手は一人だ!!」

「んー、全く・・・こう沢山いると逆に疲れるね・・・スー、ふー」

煙草を吸いつつもステイルは頭に手をやりながら、最早勝利宣言をしている・・・そこで工場内が青白い光を放つ・・・

「まあ、あっちも忙しそうだけどね・・・僕は」

その言葉を切る様に、彼の顔を銃弾が掠め血が、ツー、と頬を伝う・・・

「どおやら、科学の人間の中にも利口な奴はいるみたいだね」

視線の先には一体の駆動鎧パワードスーツ・・・他のものとは違い、耐熱の装備がしてあるようだ・・・

「僕の魔術は殆どが炎を使うからああいうのが厄介なんだよね・・・

」

科学の力（後書き）

これでいいんだろうか・・・最近極力的に心配性で胃が痛い

詳細不明

先ほどまで戦闘を行っていた工場内では、パラパラ、砂埃が巻き起こり柱の鉄骨は

綺麗に折れている・・・

「終わった、ね・・・」

ふと、ミサカファースト零番個体は呟く、先ほどまでいた人物は現在、大量の瓦礫と鉄に埋もれ、も

はや人間としての形を保っているかも分からない・・・

「さあてと・・・外も片付いたかな」

クルツ、と体を回転させると、外に通じる場所に向かって・・・ゴキーン！！

「っ!?!?」

行かなかった、否、正確には「行けなかった」と言ったほうが正しいだろうか？

ミサカファースト零番個体の行く道を遮るように飛来してきた、瓦礫と鉄の塊・・・

「（ツ）本当、ミサカって嫌になるんだよね」

今のが直撃していれば、確実に死んでいただろう・・・避けたと言

つても、強引に落下を

捻じ曲げただけであって、右腕は完全に折れて立っているのさえ間々ならない……

「アンタ、人間？」

そう問いかける先には、瓦礫に埋もれているはずだった男……

「悪いな、自分が何なのかはわかんないんだよ……」

「そういうの、ミサカは嫌いじゃないんだよ、ね!！」

即座に電撃を放つ……先ほどとは違い、ジュツ、と鉄が一瞬で溶けるほどの電気量を男

は避けもせず……

「弱いな、所詮は科学が作り出した人間には及ばず到らず、か……」

「え？、頭がつ……」

鳴神に当たる寸前に消えて無くなる電撃、次に放たれる電撃は能力者が使用中に

倒れれば暴発を防ぐため、能力は強制終了されると言う訳だ……

「あくまでも気づかれない程度とは行かないか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さてと、と言いつと・・・

「どおやらあつちも終わったみたいだね・・・」

口に煙草を咥え、自分の力で火をつける・・・

「ふー・・・」

目線を周りに向けると、バウトスーツ駆動鎧の、潰れた物、黒焦げに成った物、内側の電極等に

支障が出た物・・・様々な、残骸が存在する・・・

「何だかんだで、こしち科学サイドも厄介になつてきたね・・・ふー」

・ 白い煙は宙を漂い、何れは消える、そんな風に切なく考えてみる・・・

「何か、僕つて案外良いなキャラだったたり？」

「何を気味の悪いことを言っているんだ？」

「君にいわ」

そこでふと、言葉が止まる・・・

「何だか、僕の気のせいじゃ無かったら、青少年が犯罪に手を染め
t」

ステイルは突如として、鳴神本人の目の前から消える・・・

「自分からしても早いな・・・」

ポツリ、と虚空に向かって呟く・・・

「スーソー・・・」

背中中・・・て、寝てるし！？あれ気絶してたんじゃ・・・

「取り敢えず、冥土返しの所行くか・・・」
（フンキャンセラ）

とある学園都市の壁にスツポリ減り込んだままなのに、しっかりと
煙草を啜えたままの

人物は・・・

「何か悪いこと（ギリッ）でもしたのかな（ブチッ）・・・」

無性にキれていた……

病院に着くと冥土返しは……
へブンキャンセラー

「患者を助けるのが僕の仕事だよ？」

と快く了承してくれたそうだ……

「でも、彼は患者をよく運んでくるね、少しはお金を払ってほしいものだよ、僕の生活も

あるからね」

訂正、その日病院の一台の自動販売機が力づくで持ち去られた……

四肢を着いた冥土返しは……
へブンキャンセラー

「あの少年的に言うと、不幸だ……」

詳細不明（後書き）

- ・ 戦闘描写は駄目ですね、本をしっかりと読んで知識をつけなければ・

常磐台の女王

とある公園に座り込んでいる人間、服装はある有名な学校の制服・

・

「なぐんか、息詰まっちゃうなぐん．．．そつだ!」

いつもなら、何人かの付き添いがあるその少女はふと立ち上がると

・

「エクレアの早食いをしに行こうつと」

浮かれ気分の少女はスキップをしながら移動する．．．

自分はあまり乗り気ではないんだが、何でも「サバ缶が欲しいのよ、サバ缶が、後カレ

ー味ね」らしい．．．

「いや、居候というか転がり込んできた猫のアイツはフレンド図々しいとい
うか．．．orz」

そついいながらも、買ってあげるといふ優しい心の持ち主であった。
・

「ふう、何だあの人だからは？」

一通りの買い物済ませると、主にサバだが（笑）、カランカラーン、と鐘の音が聞こえる

ので、おそらく福引きだろう・・・

「お会計、××××円になります」

「××××××××円をお願いします」

「××××××円のお返しと、こちら福引き券になります、あちらでやってみてください」

「どうも」

「ありがとうございました、またのご来店をお待ちしております」

なんだか、しよげている女の子を横目で見ながら、「どうせ、ちり紙くらいだろう」と思い

ながら・・・ガラガラ

「おめでとーじいぞいま〜す、二等のエクレア100個です」

「は？100個？」

当選品の表を確認してみると・・・

特賞、二泊三日メキシコの旅

一等、おいしいお米一年分

二等、ノートパソコン

三等、エクレリア100個

残念賞、ポケットティッシュ

うん、おかしいだろ・・・三等『エクレリア』これだけ具体的なことが普通あるか？

「こちら引き替え券になります」

そういわれて、手渡されたのは、電子カードで「後、100個」と文字が浮かんでいる超新時代の引換券だ・・・

「は、はあ・・・」

困惑しながら受け取ると、ぞくりと何か一つの視線が体を直視しているように感じてならない・・・

「????????」

ギギギ、ときこちない音を立てながら振り向くと、長金髪の目に涙を溜めた女の子がいた・・・

「なんで・・・」

「なんで？」

「オイ、さっきの涙はどうした」

「あ、私は食蜂操折ね、シヨクホウミサキ常盤台中学の超能力者の一人よ」

「超能力者か……て違うだろ!!」

我が儘というか、自己中心的というか、偉そうだなと観察するのであった……

「君は？」

「個人情報は漏らさない主義なんだよ」

「ぶー、ツマンない!!」

「はいはい、ぶー垂れない、子供でもない癖に……」

ポケットから、何も絵のないハンカチを取り出すと……

「動くなよ」

「ちよっ!?ムガムガ……」

強引に拭いてやる……

「ななな、何をしているのよ!!」

「うーん……レッツお口フキフキ」

「何、パクッてんの!?!それ以前に可愛くないし!!」

「アホだな」

「むきー、五月蠅い五月蠅い／＼／＼！！」

顔を真っ赤にして、ポカポカ、手を回して反抗するのを軽くあしらう……

「おい、其処の兄ちゃん、可愛い子連れてるね」

柄の悪そうな男が数人、自分たちの前で立ち止まる……

「あゝ、俺疲れてるから帰るな」

「ちょっと！？、何逃げる気満々なの！！」

二人の空間に、ドブプリはまっている二人には聞こえても聞こえない……

「あのゝ、聞いてますか？」

「オレハツカレテルカラカエル」

「何で片言なのよ、もういいいわよ……見なさい、超能力者第五^{レベル5}位の實力を」

「俺たちを、舐めてんじやないぜ！！能力者！！」

男たちは構えて、食蜂は何故か鞆を漁っているが、目的の物が見つからないように必

死に探しているようだ・・・

「あれ？アレ？あれあれ！？無い！ー！リモコンが無い！ー！」

「へっ・・・へへへ、驚かせやがって、たっぷり可愛がってやるぜ」

ぼー、と経緯を見ていた鳴神は食蜂の前に立つと・・・

「なんか卑猥な発言をしているのは気のせいか？まあ、いいか・・・

ぐっと拳を握ると・・・・・・ドカツ、バキッ、ボコッ！

「いや助かったわ、私のハートをキャッチでも、したかったのかな」

「もう帰るな、日も沈んできたし・・・」

「む、無視しないでよ」

すでに対処法を習得済み（キリッ）

「まあ私の改竄力でどうとでもなるんだけどね、今回は！！貴方の勝ちってことで、ね」

「別に勝負してないし」

「あー、あー、聞こえない」

ぶー垂れたり、口の周りは汚しまくるし、どこの子供だよ・・・

「成神慶太だ」

「へっ？」

「じゃあな」

背中を向けた状態で、片手を上げる・・・

「成神君か、欲しいな」

顔に手を当てて、背中を見つめていた・・・

常磐台の女王（後書き）

すみません、食蜂は文章を見たこと無いんで、『勘』でやりました

不明人物

小さな袋と菊の花束を持ち、『面会拒絶』と札が掛けてある、病室に入る扉を開ける、

入室者名は一人・・・

ガラガラ、と白い扉を開けると、病院特有の薬の臭いが鼻をつく・・・

「?、いないか？」

360度、全方向を見渡して見ても見当たらない・・・

「帰るか・・・」

「ちよつ!?!」

いきなり、ベッドの下から飛び出してきた目つきの悪いミサカフアースト零番個体を無視して・・・

ガラガラ・・・ゴスツ!!・・・

「ん?何か、間抜けな人間が誰にも気づかれずに病室を立ち去られる悲しみを抱えて突貫してきた、様な気がしたが？」

再び扉を開けて中に入ってみると、ふみっ、と鼻を赤くして涙を堪えながらも倒れてい

る患者を踏みつけて・・・

「ぐほわあ!?!」

と、その患者側が痛みでのたうち回ったのは余談である・・・

「うっわー、センスの欠片を塵とも感じないんですけど」

と言いながら、菊の花を思いっきり電流で燃やしている・・・

「ハイドロマスター水流操作」(棒読み)

と、元々あった花瓶の水をぶち掛けてやったおかげで、火の元も鎮火しめでたしめで

たし・・・

「君たち、病院内では静かにね・・・」

にはならなかった先生もと言い、ファンクションセラー冥土返しのお叱りを受けたのは言うまでもない・・・

「一応、彼女は重傷なんだからね、大切にしてくださいと」

「はい、スンマセン」

「君も調子にのってあんまりはしゃぐと、また入院生活が長くなるからね？」

「キャハハハ、っ……イタタ」

ミサカファースト
零番個体は悲痛に身を歪めて……

「おい、大丈夫か？」

いなかったとは露知れず……

「くくく、破れたり成神慶太ああ!!」

「そげぶっ!?!」

と、顔面パンチを受けてしまった……

ヘブンキャンセラー
冥土返しが退室した後、成神はベッドの傍に立てかけてあるパイプ椅子に座ると……

「取り戻した平穩の味はいかが？」

「どごその台詞をばくってんじゃねえ……」

「くくく……」

「お前、やっぱり殺すぞ？」

ギロリ、と睨みを利かせる・・・

「なら、先に其処の紙袋はなんなのかな？」

「水菓子だ」

「ああ、果物のことねミサカ食べたことないから贅沢品なんだよね？でも、まあ、アンタみたいな奴が買ってきたのに限って・・・」

「おーけー、文句言うなら先に殺す」

「にやるほど、早計にして駄目な子ですね」

「・・・はあ、んでなんでベッドの下にいた？」

「こついうところでは、そういうのをするのが定番なんでしょ？」

「何処の誰から聞いたか知らないがそんな風習は日本にはない・・・お前、なんか余計なもの持ち込んでんのか？」

ギクリ・・・

「お前なんかギクリっていったよな？二次元のアニメじゃあるまいし・・・まさか、な？」

「三十六計逃げるにしかず」

どこかの策略家みたいなことを言って逃げようとする
ミサカファースト
零番個体を猫みたいに首元を引っ掴み・・・

「おーけー、よっぽど見て欲しいみたいだな？」

によわああああああ、と病院内全体に聞こえるほどの音量を発する
ミサカファースト
零番個体であつた……

「ミサカの病院生活が……」

大量のインスタント食品を回収された零番個体はミサカファーストベッドの上で体育座りをしている……

「患者の為の栄養バランスを考えた食事ですり足りないからって、インスタント食品に手をつけたんだ……自業自得だ」

「ミサカのせいじゃないもん……」

ポツリと呟いた後、急に体をこちらに向けると折れていない腕の人差し指をビシツ、と

言わんばかりに見せつけて……

「アンタがこんな不自由な体にしたからだ!!」

「正当な理由に見せかけて、人に罪をなすりつけんな!!」

「アヒヤ ばれちゃった？」

と相手の成神を見ようとしたが、呆れて帰ってしまった後だったの
で・・・

一人の病室内で・・・

「なんだ聞いていたよりも、彼奴いいやつじゃん（笑）」

不明人物（後書き）

一応完成

常盤台のエース

とある所に長い金髪を靡かせ、藍色のような色をした漫画家みたいな帽子を被った女

の子が『ある扉』をあけ……

「ん？あれ？なんで？」

られなかった、ガチャガチャ……

「全くしょうがない訳よ……」

と、手の指の間に挟んだ爆薬で扉を開けよう、もとい吹き飛ばそう
と思いついたが……

「やっぱり、こういうのは静かにやるべき、かな？」

と何処から出したのか分からない、工業学校で鉄を熱で切断する
きに使いそうな

先端から熱を噴き出す煙管の様に曲がった物を取り出して……

「てか、これどう使う訳よ？」

何故にこんな物が有るのかと言つと……

路地裏の入り組んだ先に屯している集団・・・

「おろ？俺のアレは？」

「ん？どうした、成神？」

「ああ半蔵、俺のバーナー知らないか？」

「これか？」

普通なら真っ黄色の果物だが半蔵の持っているのは緑色・・・

「て、バナナ違うわ！？しかも熟してないし何処で手に入れてんだよ！...！」

「ギャハハハ、おっ？浜面・・・？」

路地裏からひよっこり出てきたのは、お馴染の浜面？だが少しやつれている気味だ・・・

「・・・なんだよ？」

「バーナーとか知らねえか？」

「バーナーって・・・何に使っただよ？」

機材を集めていた成神が一言・・・

「警備ロボットとかを防ぐためのバリケード」

「もうあんじゃん・・・」

そこで、半蔵が浜面にくぎをさす・・・

「昨日どっかの誰かさんが派手にぶっ壊したからなー、俺のダンボールハウスが吹き飛んだしな（笑）」

「ギクツ・・・」

今度は成神が強烈な牽制球を・・・

「拳句の果てに金を搔つ攫って行かれたしなー」

「ぐほお!?!」

と見えないものに吹き飛ばされて様な浜面がユラユラ立ち上がる・・・

「ハッ、弁償上等うううう!!!」

と金鎚を振り回しながらも修理をしたのは余談であるが・・・

「ふー、まさか浜面がいきなりやるとは・・・」

顔に泥を付けたまま息を吐きながら、喉が渴いたので人気のないコ

ンビニへと

入っていく・・・

「いらっしゃいませー」

と愛想笑いの店員が言ってくるのを軽く受け流しながら、上を見上げるとそこには・・・

「やれやれ・・・科学の結晶か」

じー、と365日フル稼働な監視カメラが首をこちらに向けている・・・

「やっぱりサバ缶、じゃなくてコーヒート・・・あれはこの間の？」

学園都市では珍しい、常盤台中学の制服を着た・・・

「よお、ビリビリ」

「むっ、だからアタシは・・・御坂み・・・こ・・・と？はれ？あれあれ？確かに今アイツが言ったように聞こえたんだけど・・・」

うっん、と読みかけていた雑誌を片手に首をひねる・・・

「おい」

「あ、アンタは私のハイキックを受けて伸びてた奴！！」

ビシッ、と人差し指を向けて確信している御坂・・・

「おーけー、この際呼び方や人に指を向けたことや過去のことは忘れて・・・表に出るや」

「何、アンタ・・・この御坂美琴様とやる気なの？」

「はっ、超電磁砲なんて大層な名前の割にはお子様だな」

「なんか、口では勝てない気がした・・・いいわ、表に出なさい！」

またまた人差し指を指そうと思い振り上げた腕を下ろそうとしたが・・・

「あれ？またなの!？」

すでに当の本人は、買い物済ませてサッサとその場を立ち退いている・・・

「次、会った時はギッタンギッタンのケッチョンケッチョンにしてやる!!!」

と人知れず自分に誓っていた、御坂であった・・・

常盤台のエース(後書き)

やっと完成

怪人チビモーフ

学園都市の夜は、そこら辺に蟻の如く不良が屯する……

「オイ、来たぜ『元』最強が」

その男が発した声と同時に複数の男が、一人のビニール袋を片手に提げた少年を囲む……

「はぁ……」

少年がした溜息の次には、夜へ溶け込む悲鳴が木霊する……

ある人だかりの少ない路上で……

「ちょっと手伝って欲しいな、てミサカはミサカは見ず知らずの少年に意見してみる」

今、いいや、さっきからずーっとうと付き纏ってくる、布切れを纏っているハイトーンな恐らく女性に、破れかぶれで手を拘束されている……

「黙りなさい Shut up」

「え、Could you tell me・・・」

「あ、御免なさい、英語話してスイマセンと言うか、勘弁してください・・・」

ズドーン、と負のオーラを纏いながら自分よりも年下？の相手に英語で反論されて、謝罪とは・・・

「ふっふん、てミサカはミサカは堂々と胸を張って、勝利の余韻に浸ったり」

言葉のまんまのことを実行している、不審者・・・

「それでご用件は？」

「何々、焦らすで無いぞって、ミサカはミサカは歴史物のアレをやってみる」

「アレ？・・・ああ、アレね」

アレだよアレ・・・

「お主も悪よの〜って、ミサカはミサカは黒い笑みを浮かべながら貴方に近づいてみたり」

「お代官様こそ、グフフフ・・・」

周りからは、恐れしらずの不良さんからも「おい行こうぜ、あいつ等ヤバイぜ」と白い視線が突き刺さる・・・

「邪魔なんですけどオ」

といきなり真後ろから、と突発的に・・・

「ぴぎやあああああつ！！て、ミサカはミサカは大声で驚いてみる」

「驚いて無いじゃん」

其処に空かさず入るツツ「ミ・・・

「ああ？」

そこで白髪に真っ赤な目・・・一方通行は俺の顔を見て・・・
アクセラレータ

「あのカエル顔が言ってた写真の奴、見つけーたア」

ニタア、と笑う顔を見せ付けたので・・・

「「「ぴぎやあああああ！？」」」

ぴぎやあああ、ぴぎやあああ、と、悲鳴はまた木霊する・・・

「で？」

「で？じゃねえだろ・・・」

「だ？」

「この、怪人チビモーフは一体なんですかア？」

「詳しくは、図書館で（キリッ）」

「今すぐ、真っ赤なミンチに変えてやるうかア・・・」

何だかんだで、妙に気が合っている三人・・・

「面倒臭エ・・・」

「おい、怪人チビモーフ、お目当てに会えて良かったな」

「うきやあつて、ミサカはミサカは怪人チビモーフじゃないって憤慨してみる！！」

黄色な声を響かせる、怪人チビモーフ・・・

「（何かが変わった、俺の何か・・・）何なんですかア・・・」

この少年は、八月十一日あの日から何かが変わったと悪戦苦闘しながら考え込んでいるにも拘らず・・・

「それじゃ、後、よろしく」

「オイ、逃げんな！！怪人チビモーフの連れエ！！」

例え方があからさまに単純明快すぎて、分かり易いと言うか分かりにくいと言うか・・・

「ええ〜、帰っちゃうの〜って、ミサカはミサカは・・・」

「アン？待て、ミサカだと？」

ふと、唐突に一方通行は・・・

「オイ、お前、その毛布取っ払ってよく顔を見せてみる・・・」

いきなり、すんごく真剣な顔をして問い掛ける、あ・・・既に取っ
たし・・・

「・・・・・・あア？（はい？）」「一方通行、

鳴神

二人の貧相なりアクションを確認した後・・・

「うわあああああ・・・（泣）」

あまりに可哀想なので、毛布をまた被せると・・・

「そんなに甘くは無いぞって、ミサカはミサカは見下した視線を向
けた見る〜」

「上等だ、ゴラァ！！」 鳴神です

あまりに不都合兼ストレスが溜まっていたので追い掛け回すと・・・

「・・・・・・・・・・」（ビクビク）

小動物のように、一方通行の後ろに隠れて顔を覗かせる・・・

「大人気ないですよ・・・」

雷の落ちた効果音、スガツシャーーン、付きで・・・

「何故だあああ！？」

と、響き渡る・・・

三人横並びで歩くのは気がそれたので、自分の上に怪人チビモーフを乗せて・・・

「ミサカの検体番号は20001号で、シリアルナンバー妹達の最終ロッドとして製造されたんだけど、コードのまんま打ち止めで、ラストオーダー実験に使用されるはずだったんだけどって、ミサカはミサカは愚痴ってみたり・・・」

グダグダと一方通行と打ち止めの口喧嘩が始まると、只の二足歩行の鉄くずみロボットみたいになってしまう、俺・・・

「よっころらせ・・・」

「?????」

打ち止めを降ろすと・・・

「去らば!?!」

「オイ、待てやゴリア!?!」

そんな叫びも虚しく、鳴神は人間の身体能力以上で走り去ってしまった・・・

「あの体は何で出来ているの? って、ミサカはミサカは疑問を浮かべてみたり」

「さあな、こっちが聞きてえぐらいだア・・・」

一方通行は大きなお荷物を連れて夜の闇へと消えていく・・・
ラストオーダー

怪人チビモーフ（後書き）

やれやれ、何とか投稿出来ました

駒場利徳

モクモクと立ち上る黒煙、ゴウゴウと唸りを上げる炎、無論その場には一人を除いて立ってはいない。

「ふむ……………今回は全く持って駄目だったな」

アレは今とは違い二本足で歩き、両腕を振るっていた。だが、相変わらず優しさはなかった……………のかも知れない。自身を犠牲にしてまで得たものは何か？栄光を捨て、泥まみれの中で掴んだ物は何か？アレは……………一体誰なのか？

「何だこの、お子様向けじゃないのに、お子様向けのコーナーにあるお話は？」

と一冊の本を手にしながら成神は疑問気に言う。その横では、大量の絵本を幾つかの籠に入れた駒場が新たな本を購入しようとしていた。そして店内にはチラホラとガラの悪そうな兄ちゃんたちが各々本を手にかけていた。

「駒場……………俺は手伝わないか」

そんな言葉を見殺されながら目の前に、スツと籠が出される。

「俺は生憎、今持ち合わせが……………」

籠をよくよく見ると、空いているスペースに……厚さ五センチ位の万札がスッポリ入っている。器用だなあ、と思いつつ。

「……………」

駒場からの無言の重圧フレッシャーに背中を見送られ、レジ担当のお姉さんに奇怪な目でジロジロ顔を見られた……因みにチラホラいた兄ちゃんたちも同じく駒場にやらされたようだ。

そのころ、他のメンバーは少し肌寒い風を浴びながら、陽射しが気持ち良い河原の草の上に座っていた。

「今年もあの季節が来たなあ……………」

「ああ、本当だよな……………」

「……………」よかった、俺、生きてる……………」

浜面、半蔵、モブ軍団は平穩に深々と感謝を、選ばれた奴らを憐れんでいた。

上条たちが風斬たちと遭遇、シエリーたちと交戦していた頃。そんなことを露知らず、せつせと置き去りのもとに買った本を運んでいた駒場たち。

「世界で愉快的死に方ベスト10には入るな……………」

と、閉じた口の間から赤い液体を伝わっているメンバーたち。一方、
駒場は……………」

「ドキドキワクワク」

凄く目を煌めかしていた。本来それをやるのは子供の方だよ、オイ
？なんて言う元気は無かった。もはや、風前の灯レベルでピンチだ
ったんだよ。

……………

子供たちに渡した後のはご想像にお任せしよう。にゃあ……………猫か
？なんて思い振り替える。

「にゃあ……………」

「俺、疲れてんのかな？」

と、もう一度振り替える。

「にゃあ……………」

「……………遂に駒場も犯罪に手を断じて違うな、慶太」

疑惑に思いながら喉から口へ、口から空気へ出た言葉は！……！

「写真を取っておこうか？」

「頼む」

即答結構だな、あるうえへ乗り気だな（笑）駒場の携帯電話のカメラでパシャ……………
まさかそれが遠くない未来で、駒場……お前が守りたい者だとはその時は思いもしなかった。

駒場利徳（後書き）

最近はずっと割り込み投稿でスミマセン

法の書

夏の茹だるような暑さは少し抜け、学校で言うなら二学期の始まり、本格的に秋に向かっていく九月上旬・・・ローマ正教、アニエーゼ
「サンクティス率いる戦闘修道女部隊は学園都市近郊のある場所に陣形を組んでいた。その中で、班長もしくは指揮官であろう人物は・・・

「まったく、面倒くさいことを押し付けられたもんですよ」

「し、シスターアニエーゼ、そんなことを言っでは・・・」

オドオドした態度のシスターはそれを諫める。

「いいんですよ、そんなビクビクしてたら先が思いやられますよ、シスターアンジェレネ」

今度は木の車輪を抱えた猫目でキリツとしたシスターが注意する。

「そうですねシスターアンジェレネ、貴女はもう少し落ち着きを持ちなさい!」

「ひっ?!、し、シスタールチアまで・・・あうう」

一方、成神はと言うと新学期早々学校をすっぱかしていた。もちろん、それなりに訳はある。入り組んだ路地裏を進んだ先に見える小さな小屋の中で。

「土御門、いきなり呼び出して何のようだ？」

携帯電話のマイク越しで問いかける。

「いやあー、成神がいて助かったぜい・・・カンザキカオリ神裂火織、知ってるだろ？」

「ああ、あの太刀を振り回す露出犯か？」

えっ？と驚愕の声を電話越しで聞こえたのが最後に応答なし。

「・・・お前がそんな目でねーちんを」

「何処がそんな目だ、一般説だ！！」

激しく否定する。

「またまた、そんなこと言って実は気があつた」

ブチッと、ツーツーと電話の回線が切れた音がする。ブーブーとまた着信音の無しのバイブ音。

「ひびいこや〜」

「やかましいにや〜」

「ふざけるのはここら辺までにしといて、本題に入るぞ、要は・・・」

土御門の声をバツサリ遮り、自分から発言する。

「カミジョウトウマ上条当麻の手伝いをしろと?」

「大体正解だな、現在、神裂火織はイギリス清教の追っ手の騎士団を撒いたところだ、しかも今回は天草式が絡んでいる」

「天草式?」

現在はローマ正教、イギリス清教、ロシア成教の三大宗派に別れ、後は小組織がいるだけだ、今回はその小組織が絡んでいるらしい。

「そう、隠れること紛れることに特化した集団だ、しかも生まれながらねーちゃんはそのトップ女教皇プリエステスだ率いる者としての立場上、ねーちゃんは天草式に味方してイギリス清教に敵対する」

「俺に死ねと?」

「いやいや、別に戦いに加わるのではなく情報を伝えてくれればいいだけにや〜」

「情報?」

「法の書ことについてだ」

そんな話を思い出しながら、木の枝にぶら下がり双眼鏡片手に握り飯をムシヤムシヤ食べる。

「さぶ・・・一気に冷えたな、さてと薄明座跡地はほつといてとつとと天草式に接触でもすつか」

ごみを捨てる、双眼鏡をまた覗き。

「見張りは、1、2、3、4・・・8人が、夜襲に備えているな」

よつと、と木から飛び降りると、ズカズカと堂々と真正面から歩いていく。

「3人気づいたな、お偉いさんが出てきてくれると有りがたいが・・・」

いきなり、バツと周りを6人に囲まれるもニヤニヤと笑い。

「そこまで甘くも無いか・・・」

そんな言葉も耳にせず、六方から同時に襲い掛かってくる。

「教皇代理、縮図巡礼の準備、全て整いました」

「分かったのよな・・・ん？にしても人数が随分少ないな？」

「えっ？」

そこでハッと振り返る、明らかに何人か見当たらない、しかも忽然と。

「教皇代理」

「分かつてる」

ジャキと武器を構えるメンバー、目配せをして360度全て警戒している。そんなことも露知らず、カツンカツンと足音を立ててやってくる人物が一人。

「おっと、此方に敵意は無いぞ」

「そんな言葉を鵜呑みにするほど、この世界は甘くないのよな」

「聞きたいことがある、神裂火織についてだ」

ザワツと天草式のメンバーに動揺が走る、だが教皇代理だけはその威圧を緩めない。

「それがどうした？こちらに」「つこうとしているのは知っているか？」

「」「」「！」「」「」

今度ばかりは全員が目を丸くして驚いた。自分達を捕らえに来るのではなく、助けに来るのかと。

「んー！んー！」

「そこにいるのがローマ正教、オルソラ、アクィナスか？」

「ああ」

そして今回の最大の目的、このためだけに乗り込んできたのが馬鹿馬鹿しい。

「法の書は？」

「・・・こちらに来るのよな」

その後を着いて行く、すると天草式の一人が。

「教皇代理！！」

「五和、皆を纏めておけ」

「・・・はい、わかりました」

「ちと」

周辺をくまなく、分析、自分の目で観察。

「分かった、もういい、此处に法の書は存在しない」

「!?!、ほう、そこまで見抜くとは大した観察眼なのよな」

「観察眼も何も、此处は保管場所に適していない」

「もしかしたら、別の場所に「それはない、学園都市に運ぶ予定、まあフェイクだろうが奪つてからの時間では大移動も出来ない、ましてや解読をするならもうしている筈」……」

淡々と述べる言葉に、コイツはもう全て知っている、そう確信する
タテミヤサイジ
建宮斎字。

「大したもんだな」

建宮のそんな言葉を聞き流し、小声でポツリと。

「だが、腑に落ちないな」

「何か言ったのよな？」

「いや、だからと言って俺自身が協力できることは無い」

「和解も無理、か……そうになると、腹を括るしかないか、あんたも逃げるならさっさとしておきな」

両手剣フランベルジェを携え、来るであろう敵に備える。そこで、建宮の背中に向かって。

「だが、お前達にはまだ希望があるぞ」

「？」

意味有りげな台詞を残す。残された建宮は意味がわからないも笑う。

「ハツハツハ、希望、まさか女プリエステス教皇様みたいに説教されるとはな、俺も代理でしかないか」

時間は流れ・・・上条と建宮は対当している。

「私は武器を振り回して訴える平和には賛同できないのですよ」

オルソラはそう建宮に告げた。

「やれやれ計画はオジャン、オルソラのことも含めて今回は驚かさ
れてばかりだ」

下を向き建宮はポツリポツリと小さな声で呟く。

「？」

「邪魔だ、上条当麻！！」

そんなこんなで共闘するは目になった、上条とステイル。そんな騒ぎが起きている頃、ある人物はひっそりと活動していた。

法の書（後書き）

やり間違えなどの報告お願いします。

ローマ正教

女教皇然り魔術師然り、神裂火織は双方の立場で均衡を保っていた。だが当然、一彼女の場合は魔法名 *salvare 000* 『救われないう者に救いの手を』。魔法名は己の目的を記したとされる物という説がある。天草式十字宗教のメンバーに救いの手を出さなければいけない、そう本心があっても必要悪の教会の一員でもある自分では関与できないと。だが・・・

「彼らも子供ではない、ということですね・・・」

優しい微笑みで一人愚痴る。その場所は人目にはつかず、それ以前に人の出入りの少ないビルの屋上。そこに例の金髪サングラスにアロハシャツという場違いもとい、九月には季節違いな服装の土御門ツチミカド元春モトハルがやってくる。

「いや、今回の騒動も何とか終着に向かっていているようだにや・・・
・神裂ねーちゃん？」

「土御門ですか、まったく相変わらず情報が早いですね・・・」

感心をしつつも必要悪の教会の追ってかもしれないそう思い、警戒する神裂。

「大丈夫だぜい、必要悪の教会の一員として来たんじゃないし。それにんー、今回はちよろつと例の奴に頼んだだけだから、実際俺は何にもしてないにや」

そうですか？、そうですたい、と主語のない会話が続く。

「どうせ根本的な目的は『法の書』の解読法、またはそれ自体を学園都市の手中に収めるなどと考えていたのでしょうか？」

「さあ？どうでしょう、俺は必要悪の教会、魔術側だけじゃなく、学園都市、科学側の両方のスパイだからにや、何とも言えないぜい・・・もしかしたら、ねーちゃんとも殺り合うときが来るかもしれないのは覚悟している」

真剣な顔つきになり、そんなことが来ることを祈る二人であった。

「はああああ！！！」

その頃、カミジヨウトウマ上条当麻こと幻想殺し《イマジンプレイカー》を主力とした、ローマ正教のアニエーゼ部隊と交戦中の面子は数の暴力に押し殺されていた。

「これじゃあ、幾らやってもきりが無いのよな」

剣を振るう、タテミヤサイジ建宮斎子。

「そんなことを言っている暇があったら、彼女を救うために闘え！！！」

「そんな単純な攻撃は通させません」

天草式の一人、五和の海軍用船上檣の振り回した時の風圧で勢いを殺され、そのままルチアに向かって弾き返す。

「くっ……まさか少数にここまで押し返されるなんて」

そして……禁書目録は。

「
「

きちんと自分の身は自分で守っていた。

「うう……」

悲鳴に近いような甲高い音の魔術のような……いや聖母でも歌ってそつで発声練習みたいな。間接的な妨害攻撃、ステイル曰く魔滅シエールファイアの声。精神的な攻撃で、『集団心理』に呼びかけその対象となったシスターは相手への『敵意』というキーワードを基に苦しんでいる。

「ローマ正教は己が利益の為、一人の犠牲もいとわないか」

『そんなことを俺様に言っただけになると思ってたんだ？』

「さあな、こつちの不平不満をぶつけてやってんだよ」
ストレス

『俺様にそんなことを言っただけで無事でいられるのは、今のところお前一人と踏んでいるがな』

「いや、もう一人は存在するかもしれないがな。それに、親しい仲にも礼儀あり、と言うお前にも学んで貰いたいな」

『俺様はアレ(???)を完成させて目的を成し遂げることしかないぞ』

ローマ正教（後書き）

とりあえず完成。初めて見た人も、今まで見ている人も、これからもよろしくお願いします。

天秤の傾き

オルソラ協会の屋根の上、燃え盛る業火を見下ろす。矛は盾を貫き、盾は矛を弾く。所謂、矛盾と言っちゃつた。今回の騒動、イギリス清教とローマ正教の交友関係のバランスが崩れた。双方の立場から言えば、辻褄は合わない。

「まあ、今回の騒動でローマ正教は荒れるだろうな」

『蜘蛛の子が幾ら騒ごうが俺様には関係ない』

「駒が駒の役割を果たすなら問題ないんだがな・・・」

『お前は駒が駒の役を超えて主役になるとでも？クククハハハ、よく言うじゃないかメインディッシュは最後つてな』

「そつだといいいんだがな」

そこで通信術式は途切れる。これ以上やっていると、英国の犬に感づかれるからな。頭が悪くても鼻はいいからな。

ローマ正教の重役会議で決まった、アニエーゼたちへの処罰は。

「何でこんなにも罪が軽いんですか、シスターアニエーゼ？」

「わかりませんよ、シスタールチア。もう如何になっちまってる
ですかね・・・」

身分剥奪と指揮官の交代のみ。

「え、えーと、と、取り敢えず喜んだほうがいいのか、な？・・・」

「シスターアンジェレネ！！滅多なことを言うんじゃないやありません！
！」

「（あの、ローマ正教の重役を黙らせるなんてどんな化け物がいや
がんですか・・・）取り敢えず、私達は只の雑用係っぽいものにな
っちまったようですよ」

そこに、ローマ正教所属の神父でネックレス状の十字架をかけてい
る人物が歩み寄ってくる。

「そう、私が君達の新しい指揮官だよアニエーゼ＝サンクティス
？」

「ローマ正教の司教^{ピッコット}、ビার্ジオ＝ブゾーニが何のようですか？」

「そんな口を聞けると思ってるのか？修道女風情が、しっかり働けよ
ごみ屑共」

「なっ！ー！」

あまりの言葉にルチアの頭に血が上る、だがそれをアニエーゼガ宥
める。

「落ち着いてください、今面倒ごととはご法度ですよ」

「っ……わかりました」

後日……まあ、何。いきなりだが、ある所に爆弾野郎がいた。

「ふん ふん ふん」

今日は珍しくいいものが手に入ったのか、スキップしながら鼻歌を歌っている。目的地は……

「慶太、今日は良い物が手に入ったわ、しょおーい?!」

扉を開けた瞬間、中から包丁が飛んで来てフレンドの髪の毛を数本持っていく。

「そうか良かったな」

投げた本人は普通に卓袱台みたいな机の前に胡坐をかいて座っていた。

「待て待て待て待て」

「どづした？」

「いやいや、今死ぬところだったよ？まあ、それは置いて・・・
じゃじゃーん」

「んー？何だそ・・・・・・」

「いや確かにフレンドは前から、よく無駄遣いをしていたが今回の
はどうよ？」手榴弾」て。

「今すぐ捨てて来い、なるべく窓の無いビル付近で捨てて来い」

「酷っ！？見せた瞬間コレだから、駄目な訳よ」

「コレだから最近の若者は、と肩をすばめる。

「いいからよこせ、悪の元凶と馬鹿の根本を今すぐ、もしくはごみ
焼却場に突っ込んでやる」

光の速さでフレンドから奪い取ろうとする、成神。

「だーちよっ、危ない、これ以外にも沢山あるんだから」

負けじと必死に抵抗する、フレンド。

その時だった・・・ピンツ、何か繊細で触れてはいけないものが外
れた気がした。

「え？」

よくよく見ると、手榴弾の頭の部分が無い、いや其処には転がっているな、うん。

「……フレンダー！……！……貴様！……！……！」
「私のせい
！……！……！……！……！」

ゴッ、と爆炎と共にある場所のある一室が吹き飛んだ。

皆、俺は今日星になったよ。

天秤の傾き（後書き）

完成。感想、間違えの修正をおしえていただけるとありがたいです。

再始動（セカンドプロローグ）（前書き）

今回から作者、本人の創造オリジナルです。

再始動（セカンドプロローグ）

前回、ローマ正教は大胆な暗殺活動を行ったため、暫くは停滞中。イギリス、ロシア共に監視の目を光らせている。実際のところを言おうと学園都市はどの立場からも中立を保ち、今のところ攻撃らしい攻撃も発生していない。

だが・・・

確実に・・・

正教暗部の存在に臭わせる程度だが気付いてくる連中もいた。ヤカラ

マジックキャバル魔術結社、後はその予備軍など。又は実力者と呼べる魔術師だ。

高い場所のせいか、紐で挟んだ紙の書類がバサバサ！とまるで鳥が羽ばたいているみたいに風で煽られる。

「ローマ正教に強行力はなく、裏で誰かが糸を引いていると思った連中もいたか。存外、ある意味魔術の人間も腐ってないか・・・」

最後の頁まで捲った紙の束を抑え込んで初めの紙の端にルーンの刻印を刻む。すると、パアンと乾いた弾ける音がして紙は燃え尽きる。これは、一般的なケルト神話のルーンで細工をしたものだ。

「おお、案外便利だな。これからもっと、取り入れてみるか？」

ケラケラと笑いながら後ろを向く。

「いやあ、遅くなったぜい」

「相変わらず背後がお好きなことで？」

「いや、男の背中に興味はないにゃ〜、あるとしたら義妹の背中にしか無いにゃ〜というかそれしかないですたい」

「いや、おーい現実に帰ってこい。変態土御門君」

「変態でも変態でも何でも構わないが、義妹の背中だけは譲れない。ここテストに出るにぜい」

どこから出したのか、テスト用紙に指をさしている。よくよく見れば、何か名前の欄に上条当麻って書いてあるし、点数違う意味ですごいし。

「おっと、垣間見たか？」

「貝は嫌い？」

「いや、垣間見たかって聞いているんだぜい？」

「柿ピー大好き？」

「か・い・ま・み・た・か？だにゃー！！」

「神よ死ね？」

・・・黄色の明るい背景で、アハハハハと二人同時に頭を掻きながら笑いました。土御門は拳を振りかぶりました。

「て、ふざけてんじゃないにや〜!!」

「うるばちよふ!?!」

ボコンという不可思議な音に引き続き、キラキラときれいな孤の軌跡を描いてアスファルトの壁にくしゃり。

「お前といると何時死ぬか、わかったもんじゃないにや〜」

「いや待てオイ!!それ俺の台詞だから、そっくりそのまんま返すぞ?お礼とプレゼント付きで返すぞ?」

「いや、ゴフツ、既に、ギャフ、殴って、ブツシュ、きて、アバア、んじゃないばばばばばばばば」

お礼(ここでは殴って殴って殴って殴って往復ビンタのこと)を丁寧に綺麗に確りと。

「よし、肉ミンチの刑執行するか?」

グツと拳を握りしめ……………

ニヤーーーーーーーーーープツンと白昼堂々、誰かの悲鳴が聞こえた後にテレビでよくある、スイッチoff とどつかの誰かさんの音が聞こえたのは気のせいだ。

「今の声はなんでせうか？」

ピクリと反応した、日常茶飯事不幸少年はまたもや彼女を無視したことによって不幸なことが。

「とーうーまー、話を反らしていい度胸だねええええええ？」

「え、いや・・・ゴクリ、不幸だああああアアア！！！！？？？」

ガブリ

そして、ある戦いのはじまりでもあった。

再始動（セカンドプロローグ）（後書き）

とある魔術の禁書目録の映画化おめでとつございます〜。□〜
（ノ。□。）ノ。

次回の鎌池和馬さん12月10日？の新訳三巻きたいしています。
それでは、これからもこの小説を御鼻屑に。

日本ノカヘオンミヨウジク (前書き)

初めての人にはよろしく。前からの人はどうも。

日本ノカヘオンミヨウジ

「だー、疲れた・・・」

その後、土御門が何気に肉体再生オトリバースで復活して乱闘になったのは言うまでもない。あれでも、本気を出せば木造家屋を跡形もなく粉砕できる魔術が放てるが・・・死ぬらしいので役に立たない（笑）と笑っている余裕があるのはそこまでだった。

「アイツ、退院しやがったのか」

遙か前方に、茶色で短髪のアイツ、がいた。しかも片手にはこの間のゴツゴツした手榴弾。もう片手にはヤシの実サイダーのジュース。片方はもの凄く、危険。

「あ・・・」

こちらに気づいたのか？空になった空き缶を片手でしかも女の子とは思えない力で、バキバキと潰してゴミ入れに投げ込む。もう一方の手を振り上げ。

「オーイ、あなたああああアアアア！！！！」

これまた女の子には不可能なプロ野球選手の160ストリート？の直球バックダンより断然早い、200？越えの直球が飛んでくる。わざわざ栓を抜く必要もなく風圧でピンツと取れている。

「押しが強過ぎんだらうううううウウウウ！？」

ゴツツッ!!、ドドオオオオオン………パラパラと塵が地面に積もる勢いで落ちていく。

自動販売機やらベンチやら学園都市なら何処にでもありそうな色んな機械製品をネジごとひっくりかえして吹き飛ばした。受けた本人の立っていた場所は焼けた硝煙の臭いがし、地面は黒く焼け焦げている。

「これって、新たな超電磁砲レールガン? すんごい、本体よりお金かかるけど私だけの必殺技? 確実に殺せるかも ギャハハハハ」

「超電磁砲レールガンじゃないだろ超爆撃砲バズーカでいいだろ」

「てっ、なんで貴方が生きてるの? 生身の人間なら、肉ミンチどころか髪の毛一本も残さずに焼き払うぐらいの強さなのにな、おかしいな……」

まさかコイツ本気で殺す気か? なんて淡い期待を抱いている本人。確かに今のが直撃していれば本来の超電磁砲とも大して代わりの無い理屈で適っている攻撃だ。軽く軍隊相手に陣取ること可能だろう。

「コイツ、一回壊すか?」

「え、そんなあノノミサカをそんな獣のような目で見て「ねえよ、気持ち悪いわ」っち、このハゲ野郎がガラスの灰皿振り下ろすぞゴラァ?」

「ハゲでもないし、お前の保護者でもない」

「そんな冷たいこと言って照れてるのね？ミサカを前にツンデレね？アヒヤ」

「なんだこの言葉の雨あられは冥土返し△ブンキヤンセラもさぞかし苦勞したんだろ
うな・・・心中ご察し申す」

逆に言えば疲れない奴は居ないだろうと確信を踏んでいる、いやもはや確信という名のフィールドでも作れているのではないだろうか。この、足のつま先から頭のとっぺんまでどっぶり悪意に満ちた零番ミサカフ个体アイストなんか自分の知ったこっちゃ無い、なんて思っているのも束の間。ブレイキ音と共に警備員アンチスキルがこっちに向かつて走ってくるのが見えた。

「こらー、君達此処で能力はの私用は禁止されているんだぞ！！」

「何アレ？グチャグチャにしてもいいの？うわー、ミサカに会ったのが運の尽きだったね」

明らかに肉体の関節を本来曲がるべきではない方向に曲げようとしたくらんでいる

。そんな顔をしている。

「喧しい、面倒ごとは御免だ。行くぞ」

「いっやっ助けて」

待て、こんな如何わしい声をされたら向こうは平和と秩序を守るのが仕事・・・でもまさか、発砲許可なんて出やしないか。銃弾の雨あられ〜〜。

「なっ！？こちら警備員本部応答願います。人攫いです、犯人確保のため発砲許可を……」

「おい、いきなり死亡フラグか。ややこしい事をしやg」

警備員の使う銃の乾いた発砲音とその銃弾の回転音が真横を通り抜ける。その後、雨が降るかのように成神にむかつてバカスカ乱射してくる。しかも気づくとあの馬鹿ミサカフーリストがいらない、恐らく成神を嵌めて自分はスタコラサッサーというところであろう。

高層ビルの立ち並ぶ路地裏の入り組んだ先。本とかでいうと、恐らくは侵入者を防ぐための迷路状態になっているはず。いやそれより質の悪い無能力者が右往左往してそうな場所だ。そこに、のどをカラカラにして息を切らせながら潜む。

「はぁ・・・はぁ・・・此処までくれば大丈夫だろう、それにしても数が多いか？たかたか一人の犯人・・・犯人じゃないけど人間相手に警備員此処まで動くはずがない、異常だ異常すぎる」

「取り敢えず、人目のつかない程度に通りに入るか、厄介な事になる前に……」

当然それぞれの各学区、各地域、各集団に個性がある人間達チンピラがいる

のは明白だ。駒場利徳の無能力者たち^{スキルアウト}はここで活動をしていない。場所も違う。つまり、現われる人物は皆、敵。今現在居る位置には幸いにも、鉄だけで統一されたガラクタの山がある

「こつという空気には、暫く当たってないから・・・少しばかり精神的に疲れそうだな」

緊張、不安、逃走、複数のワード。複数の物体。そして導き出される回答。だが、運命^{フレイト}とはいつも唐突だ。カラン！カラン！とコンクリートに弾かれて鉄パイプが冷たい音を響かせる。

「ゴクリ・・・」

思わず唾を飲み込む。手で壁を伝い、ある角を曲がると・・・また黒い山がある。帰ってきたのかと思いよく見てみると、今度は薪をするのかどうだか知らないが集められた木の枝が山になっている。そしてまた少しばかりいくと今度は、只の土の山があった。そしてまたさらに進むと青色に塗られたバケツがバラバラになって形さえ分らないが山になっていた。そして最後に、辿り着いた先には数本の・・・

「科学の町に、赤く塗られた作業用のコーン。科学の町といえど不法投棄してあるものがあからさまに可笑しい。俺が見たものは最初が鉄、次に木の枝を・・・待て、有った物をそれとしてみるのではなく、特定の象徴としてみるとどうなる？」

現在過去あらゆるものに適して考えてみるとふとあることに気づく。存在している物はバラバラだが一つのキーワードに意味が通る。そう日本の陰陽師で有名な『五行思想』。

「最初から『金』『木』『土』『水』『火』として考え、その中で現存しているのは『木』と『土』。太陽は出ているがこの場所は薄暗くなっている。すると、相手を打ち滅ぼして行く『陰』の関係。これはどうなる？」

その瞬間、ドサツと体が膝から崩れ落ちる。まさか自分から倒れたのではない。立っている地面から根こそぎ力を吸い取られている感じだ、今になって考えてみればここに入った瞬間からそんな感じだったのかもしれない。長居をしすぎたのだ。

「侵入者の生命力の吸収、か……」

霧が現れるかのように段々意識が遠のいていく……

「どつやら罫ヒツシに引ッ掛かつてくれたようだよ」

「何言ってるんだぜい？コレも俺様のお陰ぜよ、ステイル？」

「僕のルーンあつての罫だけどね……」

ルーン……ステイル。マグヌスの専売特許。特定の文字を刻むことによつて発動する魔術。大なり小なり種類は豊富だが、同時に展開範囲が狭い。

「無駄口を叩くなら、ソイツをとつと最大宗教アークヒショップにでも見せて来い」

「もとよりその気で態々学園都市まで赴いたんだけどね、てコイツ

重くないか？」

「おやおや、この際健康面に気をつけて禁煙でもすればいいにや」

「くっ、どうして僕達がこんな目に・・・」

二人の男は不気味そうに・・・しょ気ていた。笑うに笑えない状況で。

日本ノカヘオンミヨウジ (後書き)

空いている時間を使い何とか完成。

紳士の国へユナイテッドキングダム

「ん……ここは？」

朝日とも言える、気持ちの良い日差しで目が覚める。寝床はふわふわのベッド。暗くてジメジメして、硬くて冷たいビルの路地裏とは打って変わり、このまま後三話は寝ていられそうだ。だが寝ぼけた頭をフルに動かし、この個室から……現在の状況そこから導き出される最良な判断を模索する。すると、耳に覚えのある声が入ってきた。扉を挟んだ向こう側からだ。

「で……はこんな奴……か？」

あの赤髪のステイル「マグヌス」という魔術師の声だ。もう一人は聞き覚えの無い若いような女性の声……

「だ〜から……なのよ？ステイル」

で古風な喋り方だ。眠気が覚めていくのと同時に、脳が活性化して話の内容が鮮明になっていく。こう……ノイズが消えてよく聞こえるラジオみたいな感じだ。耳を扉に当ててじっと息を殺す。

「彼を必要悪の協会ネセサリウスの人間にする？馬鹿げている……法の書以来、各地域の魔術結社マジックキャベルやローマ正教の問題で対処に忙しいこの時期に素人を入れるなんて」

「むう、いいじゃない 虎穴にいらすんば虎兇を得ずなのよ、お分
かり？」

「先ずはその問題より、貴女の馬鹿口調を直したらどうですか？^{アイ}最
クビシヨツブ
大宗教」

「だ、だからこれは!？」

「はいはい……」

「（完全に出るタイミングを失ってしもうたーーーーー）」

なんて、頭を抱えて蹲ろうとした時ちようどそこに……

「ここに、密入国者が居ると聞いたぞ!!」

パンツ

「!?!?」

なんて誰かの掛け声的なものが聞こえたと同時に、ある人物を殿に
謎の集団が扉を蹴破ってやって来る。冷たい色を放つ金属、ガチャ
ガチャと音を擦らす様な鎧を着た謎の集団、^{イギリス}英国で言う『騎士派』
の面面だ。

「あら？神聖なる神の場を土足で汚すなんて、よほど急用な用なの

「ね？騎士団長」

ナイトリーダー

「どこが神聖なるだ我が英国ボコクの金を無駄に使ったあげく。こんな物を良く建てたものだな・・・『清教派』の長よ」

「これはこれは、騎士団長ナイトリーダーが直々に来るとはこれまた厄介なものを持ち込んで欲しくないものですよ・・・」

煙草を吸おうと火を点火するステイルに対して、騎士団長はいたって冷静に。

「ここは禁煙だ、英国の紳士であるならルール等と言う当たり前のものは守る筈であろう」

「おっと、之は失敬・・・極東の地では何分自由でしてね」

「ふんっ・・・何、私とて暇ではない。せめてあの者が居れば助かるのだがな・・・そんな事はどうでもいいのだ、ここで密入国者を匿っていると情報が入ったのでな、確認だ」

「居たりけるね」

「居るな」

「（あっさり!?!?）」

幾らなんでも二人があっさりし過ぎたので少し動揺を表した騎士団長であったが、冷静さを欠いては、と思い込んだのであろう。直ぐに返答する。

「ならば、平和の為に身柄を渡せ」

「堅きことね、でも我々『清教派』のことには『騎士派』の影響は及ばない・・・そう決めたのは貴方達の上司でありけるし？それに実はちゃーんと入国許可は取ってあるのよ・・・不正だけど（ボソツ）」

「ん？何か今、肝心な部分を言わなかったか？」

流石は長、気づくところには勘が働くようだ。それでも引き下がらない騎士団長達をステイルは呆れたような横目で見ると、個室のある部屋に向かって強調する声で。

「要するに、顔だけでも見せとけばいいのなら・・・ほら極東からお客さん呼ばれてるよ」

キーンと扉の間接部分の金具がきしむような音を立てる、その音がさらに強調するのが全員が全員、目をそちらに向ける。当の招かれざる客人、成神はというと。

「おい、此処は一体何処なんだ？」

「開口一口目がそれかよ、全く育ちの良い子供は之だから・・・」

と完璧に馬鹿にしているような声をかける、ステイル。

「あら・・・」

と驚いたような風で口をポカーンと開けて掌で口元を覆う、最大宗教。そして最後の騎士団長はというと・・・。

ロイヤルガードイアン
「聖守護者？そんなお前は・・・」

と聞いた事も無いような、言葉を口にする。それを聞いたステイルは正しく、そんな言葉を聴いたこと無いぞ、と不思議に思った顔をして。

「えーと、彼は異民族だよ？」

「いや、気のせいか・・・纏っている者がある人物に似ていたのでは、迷惑をかけたな撤収だ」

ぞろぞろ、蜘蛛の子を追い払うかのごとく、早く行けよ、見たいな感じで混雑する入り口。後に残ったのは静寂と、騎士たちの足跡。

「まあ、よく分からんが・・・・・・」

根本的な原因の成神は堂々と、クルツと辺りを見回そうとして視界に入った最大宗教を見て急に言葉を無くした。男女の二人が？を浮かべていると・・・

「すんげえ、綺麗な人だ」

と拍子抜けの言葉が返ってきたのは。これまた予想外だった様だ。

紳士の国へユナイテッドキングダム (後書き)

出来は悪いが取り敢えず、投稿完了。

聖守護者へロイヤルガーディアン

「へっ?」

などと、ブラックホールが全部飲み込んだじゃったよ?みたいな宇宙に一人取り残されてポツーーーーーとする女の子みたいに気の抜けた間抜けな声を出した束の間。

「んう!?!、う、うおっほん!」

と最大宗教。^{アイクビショツプ}正式名称、ローラリスチュワート、騎士派の『長』騎士団長^{イトリダー}と同列の権威して同じく清教派の『長』であり。トップとしての立場とは裏腹なことがある。現在赤みの掛かった顔を誤魔化しつつ、まあ誤魔化せてないが……。

「こ、細かい事はどうでも言いけるのよ!??」

「最大宗教、^{アイクビショツプ}誰と話しているんですか……」

やれやれ、と逸早くさじを投げ出したステイルは可哀想なものを見るような目をワタワタと、あっちへオロオロこっちへオロオロしている上司^{ローラ}に向ける。

「あわわ……」

「まあ、もちつけ」

「君のせいだろ?」

「そうなのか？」

「あわわ・・・」

「そうに決まっているよ・・・」

「「あわわ・・・」」

ポケ二人《ローラ&ナルカミ》、ツツコミステイル一人のお笑い漫才ショー・・・
つて言つてられはしないな。そんなローラを見て、成神もあつちへオロオロこつちへオロオロし始めた。はあ・・・と深く溜息をついたツツコミさんはなんと！！ダツ（走り出し）バコン（聖堂の大扉を開けて）タツタツタ（・・・）

「「逃げた（りけるの）！？」」

「まあ、ステイルはほつといても何れ戻ってくるでしょうに、フフツ・・・恐らくね」

「そうなのか、あの捨て犬。呼んで字のごとくだな、へへツ・・・多分」

フフツ、へへツ、フフツ、へへツ、「誰かこいつ等どうにかしろよ・・・」とステイルなら捨て叫んでいたであろう。恐らく、犬猿の仲に似たようで似ていないことわざがこういうときに使われたのは推察であろう。そんな事を知る由も無い、ポケ二人はいよいよ本題に

入ろうとし始める。

「さて成神^{アナタ}、何か質問したいことはあるかしら、内容によっては答えないこともないのよ？」

「なら……」

「早速、結婚していますか？」

「却下」

「お幾つですか？」

「女性に対して失礼」

「スタイルとはど」

「上司と部下」

「ぬぬぬ……（いや、これはある意味面白いかも）」

言うこと成すこと先読みのごとく即答された、と成神の本心が見え見えの様な気がするのには恐らく気のせいなはずだ。こういう場合は、知略でねじ伏せるのは先ず無理であろう。恐らく数の功より年の功、そんなこんなでこのやり取りは暫く続く。

と、そんなやり取りがされている時刻、とある場所の静かな静かな会話。

「ナイトリーダー
騎士団長こんな時間になんのようにだし」

椅子に座って騎士団長の入れた紅茶を飲んでいて、ちよつと色々見えて際どい真つ赤なドレスで身を飾り、第二王女こと騎士団長の上司にして名前は、キャリーサ。そして英国女王エリザベータの娘。

「いえ、もしかしたらですが仮に彼が生きていたとしたら・・・ロイ聖ヤルガーディアン守護者が生きているかもしれせん」

「!!!!、それは本当か!!!」

椅子から飛び起きて、まるで光の早さかのように騎士団長の胸倉を掴み問う。ぐ、ぐるしいですキャリーサ様、と呻き声を上げる声に反応して少し力を抜く。

「ふう、落ち着いてくださいキャリーサ様。あくまでも噂です、それに確信はありませんが似た人物を・・・」

「な、なんだあ・・・って、そんな確証の無い情報を持ち込んでくるなし!!!」

何とも綺麗な洋風の部屋の壁にかけてある様々な武具のなかから一

つ、先端に槍と斧が合体した通称ハルバードと言われる武器を片手で手に取ると、はぁ！！と騎士団長目掛けて振り下ろす。

「えっ……なぜっ!?!」

と間一髪横に飛びのく。先ほどまで彼の居た場所には深々とそれが突き刺さり、見るも無残に床は砕け散っていたが彼はこうして生きている、素晴らしいほどの動体視力と運動神経だ。部屋の外からは「またか」「これは生きた心地がしないな」と不安と恐怖に満ちた騎士達の声が聞こえる。部屋の中に居る騎士団長はなぜか冬でもないのに寒気を覚える。そして冷徹で容赦無しの目を向けたキャリーサはこう、口を動かした。

「この件で次は無い」

聖守護者へロイヤルガーディアン（後書き）

一応、投稿完了です。

希代の剣へカリバーン

遙か昔、円卓の騎士の騎士王は岩に刺さった、選帝の剣を抜いたとされる。それは湖の精霊が持ち主という摩訶不思議な剣で、抜いたものは王になる。そんな曰く付きの代物で有ったらしい。らしいというのには現存が確認出来ていない、何故かはよく語られてないが、騎士王亡き後に配下の者が『湖に投げ込んだ』という説になったのだ。その剣の名前はカリバーン、所有者に尋常ではないほどの力量を与える聖剣であるとされている。

「なのですよ」

ここは大英図書館のような博物館。そこには以前《、》のローマ正教の修道女オルソラと会話に割り込んでくる。

「というのが、英国の一般的なお話でありけるのよ」

この人。絵本片手にニコリと微笑むローラ。彼女自身が騎士王の血を受け継いでいるということは知っている人は知っている。

「ぐう……」

「寝るな」

本人は、ていやあと掛け声を出しているのに対し。ゴスツという音が、厚さ二センチ前後の背表紙の角の部分が、頭蓋骨にめり込むことによって繰り返される。

「おぶほお」

「で、オルソラ^{II}アクイナスは何用があつて来たのでありけるの？」

「えーと、お話をしていたら忘れてしまったのですよ」

「ズーン」

もうやだとコツチからやけくそになって喚きちらす。その目に移つたのは……なんか、ギンギラギンに然り気無く、という歌詞が付き添うな物が頑丈そうなケースに入っていた。

「アレは？」

んう？となにか興味に引かれて反応したローラは簡潔に。

「ああ、アレは模造品レプリカでありけるけどね、英国の国家的霊装のカーテナ^{II}オリジナル。まあ本物とは月と蠶なのよね、ギンギラギンに光ってないし」

「説明がすんげえアバウト」

「まあ、学園都市やら外の魔術結社マジックキャバルに易々と見せる気はないだろうし」

英国ユコは随分と噂と違いますな、と軽いノリで本イシメから話題を反らしつつあった。

「霊装と言えば『原典』まあ貴方みたいな例外な奴は、科学関連であまり耳にしたことがないと思われるけど、それがゴツソリ持ち出される事件があつたの」

彼に向けて目を細くするローラに対して、ピクリと頭の髪の毛が反応した本人。幸いなことに気づかれなかったようだが、疑いの眼差しを向けてくる。そんな緊張感漂う現場に思いも由らない客がやって来た。

「さあここに我らがパシリ様はいるかにや〜？」

「帰れ、シスコン」

「えっ……う、うんうんそうだぜいそれが悪いのか、女たらし」

少し普段と違う一面に驚きつつも直ぐに体制を立て直す土御門^{シスコン}。

「アアン？」

「せっかく耳寄りな情報を持ってきてやったんだにやー、感謝するにやー」

そこで珍しく真面目になり、額からは汗を流す。ここまでコンマ十秒と掛からず。そして衝撃の事実を伝える。

「お前ん家吹き飛んだぞ」

「はっ？と体は動揺を通り越して硬直した。いや燃えたんなら分かるが、吹き飛んだ、て表現は可笑しいだろ。アパート並みで孤児たちのための全寮制にしようとしていたのとは訳が違う。まさか、バレたのか？」

「どうやら、能力者同士の喧嘩らしいぞ」

次に帰ってきた言葉に、どことなく安堵と同時に怒りが心の底から湧きあがってきた。それも、誰もが端から見て分かるくらい分かりやすい程の濃さの憤怒だ。

「何処の誰がやったか知らないが……代償はキッチリ貰うでしょう」

かくして、英国ビックリショーは閉幕したのであったが帰りの飛行機は………アレだった。

希代の剣へカリバーン（後書き）

携帯電話からだど、難しいなあ。

零番個体へサガシビト

その日の空は、青で透き通っていた。

「おうえつぷ、吐くかもしんないけど・・・何の冗談だ」

肩にかけていたバックをアスファルトの上を下ろすと目の前の光景に唾然とする。土御門を見ると肩をすぼめて、わからない、とジェスチャーをしてきた。確かにココは跡形もなくなっただらしい。

「何にもなくなってるじゃないか」

「おつかしいにや〜、俺がこないだ見たときにはスツカラカンの箱庭的だったぜい？」

「そんなことを俺に言われたところでどうしろと？」

そう、ココというのは成神自身の部屋であった。大方、空間能力系かと思っていたがアレってそっくりそのまんま移せるような便利な能力だったか？と不思議に思うのも無理は無い。その証拠に。

「おい見てみる、ここに僅かだが色の違う部分があるぞ・・・ってことは空間能力で間違いは無さそうだが、どうする？土御門さん的にはどっちでもいいけどにや〜、警備員アンチスキルが風紀委員ジャッジメントの連中に『部屋がひったくられましたー』てか？アハハハハ」

「アハハハ・・・よし歯を食いしばれ」

「俺に死亡フラグでも立てたいかは知らないけどなー（笑）もしか

しての見抜かれちまったか？基本的に土御門さんは天邪鬼ウソツキなんだぜい、てなわけで……ここからは真面目な話だ」

急に時化した面をしたかと思うと。胸のうちをがさごとと漁る様にして徐に取り出したのはいくつもの紙が束ねられた書類のようなものだった。

「ミサカフアースト零番個体。知らないとは言わせないぜ、ここ何日かお前と行動していたのは分かっている。それで上からの命令でソイツを回収しに来たといったところか」

「ああ、知らないことは無いな」

「この件に関しては学園都市の連中のしたことだ。まあ、お前には悪いが俺たちの邪魔はくれぐれもするんじゃないぞ。コイツは友としての注意、いや警告といったところか。なんでも、サードシーズ第三次製造計画ンだっけか？その実験体に改良してシートとか言っもんをだな」

「ああ、分かった分かった」

ヒラヒラと手首を動かすのと同じように揺れる土御門の手の書類を制し。話にも口を挟み片手を徐に肩より上に挙げると、それとほぼ同時に土御門は利き手のポケットからある物を取り出した。紛れもない人を殺める物だ。だが、その次の行動よりも早く成神が動いた。

「コレも人助けだ」

ボンツという破裂音の後に続くようにしてパンツパンツと乾いた音が二、三発響いた。破裂音と同時に白っぽい粉のようなものが宙に舞い、乾いた音の後に銃口が火を噴いた。前の見えない場所をくぐり抜けた土御門は。

「ゲホツゴホツ、コイツはメンドクセーことになってきたぜい」

その顔は笑っていた。これから面白い鬼ごっこをするような子供のようじ。

「いきなり撃つか普通？情けつてもんが塵程度として感じられねーよ」

体についた粉を手で振り払うと目当ての人物を探索することを始める。当然手がかりはゼロだし、アイツが普段何をしているのかも知らない。

「てか、何でアイツのために俺こんなことをしてんだ？そこまで親しい訳でもないのに、まあ削板のバカが移ったか」

探す、というキーワードに重い足取りになるのは無理でもないがそれでも、努力はするか、と胸の内に思った。その日の空は白かった。

「っ……何だろ、何かミサカにとって良くないことが起こりそう

な予感が」

その当の本人とされて^{タイゲット}いる人物は一人ブラブラ町を歩いていた。服装は白っぽい味気の無いものであった。だが、その色とは全くの反対で本人の性格は過激なものであった。

「くおらあー！信号見て渡れやバカ学生！！」

「ムカツ」

荒削りの鰹節ではないが、こう・・・そぎ落とすというか殺ぎ落とすみたいな風に彼女は自身の能力を掌に集中させようとしたその時。

「攻撃性電流探知、攻撃性電流探知」

「チツ・・・ミサカは何にも悪いことしてないのに物騒な町だね、こりゃ暴れがいが・・・」

ふとある言葉を思い出す。お前人前で超電磁砲^{レールガン}もどきをバカス力打つなよ？そんな単純だが重みのある言葉だった。ここでは、暴れてはいけない、だが私は壊すために作られた物。二つの合間見える感情がぶつかり合う。

「はあ、ミサカって何時からこんなに角が取れて丸くなって、アイツを押しつぶしたくてぐちゃぐちゃにしたくて・・・」

ネチネチと最初らへんは良かったのに後になるにつれて不平不満ばかりである。

「あ、欲求不満でいろんなところが大変なことになっちゃいそう、ギ

「ヤハ」

そこでふと足を止める。

「何でアイツのことばっか頭に浮かぶんだろっ、もしかしてコレが！！親の敵を討つときの気持ちってやつううううっ！！?????」

「ちょっと、君いいかな？」

そんな周りからドン引きされている零番個体に声をかけてくる男。普通からしてみれば勇気があるかもしれないが、今は違う。優しい声なんかじゃない。相手を補足して確認をしている狩人ハンターの声である。雰囲気といい纏っているものがきな臭いと彼女は感じているであろう。

「お生憎さまだけどミサカには帰るべき場所ってモノはもう当の昔に変わってるから、物騒なことが好きなのは変わんないけどね」

彼女は決意を固めて力強く言った、いつもなら「ギャハハ、これが所謂ナンパってやつ？」と惚けてもおかしくないが何故かそうだったのだ。彼女は変わったのだ。それに対して、そう、と男は言うとその行動に出たのであった。

その日の空は濁っていた。

「彼女かい？今朝は来てたけど目を離すと直ぐに居なくなる困った

子だからね、君からも大人しくするように頼んでくれないかい？」

カエルの先生から念を押されてさらに重くなった足取りで病院の自動ドアを通り抜けた途端に肩を落とす。よくある、こういうときに限って見つからないパターンというやつだ。

「本当、こういうときに限って見つからないな・・・」

視界に入ったのは建物に大きく映った大型の電子掲示板のようなものである。

『本日は一日快晴でお布団を干すには・・・』

だが実際には、空は黒く今にも雨が降り出してきそうな勢いだった。

「雨が振りそうだな、学園都市の天気もあてにはならないか？そうになったら厄介だ」

学園都市というのは文字通り、学校が凝縮された町並みであるといつても過言ではない。雨が降れば多くの学生が傘を差して見通しが悪くなる。その分、リスクは高まる。もしかしたら、もう相手側に見つかっているかもしれない。自分一人ではどうにもならないかもしれない。

「はあ、傘は・・・いいか」

その日の空は・・・

零番個体へサガシビト（後書き）

ひねこぶらぶらのユニバース。

学園都市の闇へアンソク

湿った路地裏、こついった場所はある能力者にはうってつけの場所である。

「ヒヤハハハ、ミサカをイカそうなんてまだ一万年は早いんだよクズがア」

そこらに横たわっているのは零番個体を回収しに来た者たちだ、当然のごとく能力者ではない武装した連中だ。出なければ可笑的い、一人連れ戻すのに大それた計画を立てるはずもない。

「この手の連中は集団戦の短期間で仕留めるやつが八割がただもんねー、それに」

彼女の手に集中した迸る雷は青白い光を放ちながら壁を沿って、その先に居る面子に襲い掛かる。ゴウアと濁った声を出してその場に倒れこむ。その倒れた隊員を足で踏みつけるとポケットから徐にソレを取り出し、中指と人差し指ではさむと標的の眉間に照準を合わせるようにして撃つ。

「ミサカ真っ赤な背景って大好きだよ」

ゆっくりと近づいてきた人物は武装した連中がいないことを確認した後、彼女に向かってニコツと笑う。

「自分はあまり好きではありませんよ」

「ルー、ルー・・・お掛けになつた電話は現在電源が入っていないか」

二つ折りのケータイをパタンと畳むと、勢いよくポケットにねじ込む。

「チツ、俺は態々こんな事のためにココに住み着いてんじゃねぞ」

人通りの多い歩道で焦燥を露わにしながら、ひたすら零番个体を捜す。何処に居るなんて分からないそれが腹を立たせる。その後ろからヒッソリ近づく黒い影のソイツはゆっくり肩に手を伸ばすと・・・

「おう、なんだ成神じゃね？」

「んー？半蔵か珍しいな、お前が声かけるなんて」

「いや俺だって、毎日空気じゃねえんだからよー」

左手をポケットに突っ込んで右手を肩の高さまで上げる、全身黒服のような格好をしたこの男。

「んで、何か探しもんか？」

「まあ、実は……かくかくしかじか」

「うまうままるまるっと、へー女ねお前のコレか？」

物分りの良いコイツは小指を立てる、要は『恋人か？』と聞いていることだ。

「なら、グーで殴ってやろうか？」

途端に真っ青な顔を見ると小言で『駒場の、ぐー、と似てて恐えよ』とブツブツ言い出す半蔵。

「まあ、髪がボサボサの茶髪で目の下に隈っぽい物がある&電撃使エレクトロマの能力者……か、見かけたら教えてやるよ」

「それじゃあな」

「そっいや、風が冷たいから気をつけとけー」

「へいへい……」

「ギャハハハハハハ」

走り去る成神の背中を見送って両手をポケットに突っ込むとふと空を見る。黒く渦巻く雲の塊がゴウゴウうねりを上げる。

「俺アイツと連絡取ったことなんて無い、よな？てか寒みい……」

そんな季節ではないはずなのに、雨の降りそうな予感から寒さが舞
来る。

「さてと、こここの路地裏にでも・・・」

そう思って曲がった路地裏の奥からパカンと何かが弾ける音と眩い
光。ここにいるに違いないそう思って進んだ先に、いた。

驚くことに気を失っている零番個体があった、それともう二人。

「おや、アナタは一体？」

「海原？てお前か・・・一步遅かったな！！」

腰に手を当てて威張るような格好をした見知った人物と後ろで腕を
組んでいる紳士的な人物。

「回収完了って所か？」

「そんなところだ、お前はどつする？」

科学と魔術に関連している土御門元春。

「土御門の知り合いですか？どちらにしろ自分は御坂さんもミサカさんを傷付ける気は毛頭ありませんよ。だからこそ、こつやっけて目に付かないように暗躍しているんですから」

「暗躍、？」

「はい？取り敢えず自己紹介でもしておきましょう・・・海原光貴ウナハラミツキといっておきましょうか？」

「なら海原、ソイツをどうするつもりだ？」

「それは言いません、ですが『あなたの迷惑になる』行為はしませんので安心してください、きちんと安全は確保しますから」

「ヨシカワキキョウ芳川桔梗か」

ピクリと今まで何も反応を見せなかった海原がたじろいた。そんなに名の知れた人物ではないのだ、絶対能力進化《レベル6シフト》の計画の一人だったのから。

「アナタは一体『何者』なんでしょうか？」

「気分屋だ」

そのワードに海原は『希望』の意味を持ったのかもしれない、『彼』と同じように愛しい人を守ってくれるような・・・

「レディオノイズ欠陥電気と妹達の頭ラストオーダーの打ち止めとシート・・・そして第三次製造サードシー計画。期待はしないがいい方向に向いてくれることを祈るよ、祈るものはいないがな」

そういうと、これまたあっさり降り出した雨の中に消えていった。雨はポツポツと期待を裏切るような思いを降らしていた。

「変わった人ですね・・・」

「だがアイツは何れ俺の敵になるな、確実に」

何もかも見通しているような口ぶりの彼にポカーンと二人はしていた。アレだけ拒んだ人物がここに来てあっさりと身柄を引き渡したのだ。驚かないはずも無い、だが闇で生きている彼らたちはきつと、そういう人物を求めているのである。

学園都市の闇へアンブレ (後書き)

今回はちょっと考えがまとまりませんでした。

第七学区へダイナナガツク

大覇星祭一週間前・・・

第七学区にて無線による会話。

『あ、あー、聞こえますかーこちら浜面』

『ベーラ、ベーラ。こちらは成神い』

『ベーラベーラ、てなんだよ？』

『ん、昔見たB級映画で無線でいってたこと？』

『俺に聞かれてもわかんねーよ！！？』

『うつせー』 『喧しい』 『……バナナ』 『あ、知ってるかも』 『話が合わん』

などと不特定多数（一人リーダー）の無能力者は新しく手スキルアウトに入れた、旧製の無線機を使ってコミュニケーションをとっていた。路地裏で、一メートル間隔で、綺麗に整列してバカだろ？

『仕方ねえだろ！？なんか拾ってきたんだから』

『浜面悪いと思う人拳手』

『わかんねえだろー、無線なんだから……ん？』

ババババババババ、と鳥が羽ばたきでもするかの様に浜面の前後
拳手。

『は、嵌めやがったな!!!』

何時もの光景、何時もの時間。皆が笑い、皆が。その時だった息を
切らした、一人の若者が駆け込んできた。

「あ、警備員だ」
アンチスキル

「なにい!!!」

「……手が早いな」

「恐らく無線かなにかの周波数でバレたんだろ」

「無線……」

皆が手元にあるソレを見た。成神も見た。浜面も見た。半蔵も見た。
駒場も……見た。

『『『『イヤッホー』』』』

「どこに喜ぶようそが!!!?ずらかるぞ!!!」

一方その頃、スピーカー片手にアノ人は堂々と路地裏の入口で通行
人の視線やら抗議の全てを無視しながらも叫んだ。

『毎回言うのもなんだけどさー、こ・ち・ら・は!!!警備員第七十

三活動支部所属黄泉川じゃん。いい加減にしるじゃんよー、もう少ししたら……』

「げ、またあのデカパイか!！」

「ビクッ……恐るべし巨乳」

「俺の一目惚れ……」

「うげえ!?!?!」

どうやら三人には悪い思い出、訂正一人はいい思い出があるようだ。今はそんなことはどうでもいい。

「(言えない、仮にも知り合タニンいなんて)てか、何故に警備員が出てくる?風紀委員ジャッジメントでこと片がつくだろうに」

「忘れたのか?もうすぐ大覇星祭だぜ、つまりは外からの客が来るから徹底的レベルに鎮圧だろ、ま、ダセエ」

「……来たぞ、警備ロボットだ」

「警備ロボットお?てか、俺警備ロボットがなにしてくるか知らねーぞ」

「アレはスタンガンでビビビだったはず」

「ビビビ(笑)」

警告、警告、とローラーのついた三脚のような足を滑らかにスライドさせて、目視で五台、後にも数台存在するようだ。

「……フンッ!」

その数秒後、近づいてきた鋼鉄製ロボット相手に駒場の足から放たれた『尋常ならざる蹴り』は一台目を吹き飛ばすとポウリングのように後続の三台を巻き込んだ後、残った数台をその爆発で破壊した。あつという間に残るは一台。

「相変わらず桁違いな、破壊力だな」

「……伊達にオマエたちを率いてはいない、覚悟あつて俺は此処にいる」

半蔵と浜面と成神に背を向けた駒場は何時もならゴリラ顔の怖い兄さんだが、それでも内実仲間思いのいい奴、という本当の『在るべき姿』になった。

「やっぱり駒場のリーダーでなくっちゃな!」

「そつだぜ俺は計画担当だしな、目立つことはしない主義だしな」

軽く首を振るジエスチャーをする半蔵。その時だった『舶来』と呼ばれる少女が来たのは。

「はまづらー」

「成神任せた」

「任せろ」

「えっ？何するむぐう！！？」

ここまでの間、僅か三秒。一瞬にしてあらゆる角度から少女を隠した成神。頼んだのは呼ばれた本人だった。

「むぐうむぐむぐう」

「もう少し待ってっておぶほえ」

小さな頭突きは顎にヒットして予想外のダメージが発生した。突然過ぎて目の前に手をつこうとしたばかりに。

「ふにゃ…………」

「っ、つつつぶしてもーたー！！！！？」

「その格好エロい」

半蔵エ…………、駒場は残った分の駆逐、浜面は壊した分を積み重ねて即席のバリケードを。因みに他の面々は無事に紛れ込んだようだ。

「行くぞ」

半蔵の案で駒場以外の三人は帽子を深く被った。『舶来』には駒場の上着を被せたところ、臭い、といわれた駒場は結構落ち込んで浜面の作った足止めに感謝した。その後は計画通り無事に難を凌ぐことが出来た。

一方……

『駄目です、主要の電子回路が抜かれるか破壊されてます、下手に触ると感電しますかもです』

「んじゃあ、手作業で取り除くじゃん」

『えー……わかりましひゃあ?!?!?』

その現象はその警備員が強引に山を崩して自分と反対側に、ガラク
タと化したロボットをドスンと突き落とした瞬間だった。

『はい!? えーと……』

「一体何があったじゃん？」

「テコの現象? テコって算数のアレか？」

「そう、あのシーソー的な」

成神の質問に対してこうい、と訳のわからないジェスチャーによっ
て浜面解説。

「まあ簡単に言えば、あいきゃんふらーい、の完成だ」

「あいきちゃん、ふらーい、ね……」

鉄装大丈夫かー、らいほうふです、などと警備員同士で助け合っている会話を無視して、黄泉川はというと不気味な笑いを浮かべていた。

「全く、馬鹿ばっかじゃん……」

第七学区へダイナナガツク（後書き）

謹賀新年、明けましておめでとございます。作者はほつほつ並に疲れています。がこれからもよろしく願っています。

時差へジサ

イギリス、13日午前7時。

(、・、・、) デデー

いきなり訳の分からない顔をしているのは、ジーンズ店主のオッサン。対当するはキョウコウダイリ教皇代理ことタテミヤサイジ建宮斎字、これまたオッサン。

「高いのよな」

「高くねーよ」

この繰り返した。かれこれ二時間に渡るコソウ死闘の末、建宮はついによく分からないがぐちゃぐちゃの紙幣をよく見るレジの近くの皿に叩きつけた、に至るまでの瞬間!!

「もうどうにでもなっちゃえなのよな!!?」

「駄目ですよ? 教皇代理」

「い、五和!!? いつからそこに……」

「……………へッ」

いつもは大人しくて皆に優しい五和ちゃんだが今回は鼻で笑った後、やれやれと呆れのジェスチャーをした挙句、建宮の襟首をつかむとひこずっていく。

日本『学園都市』 12日午後10時。

「で？」

一騒動終えた成神の目の前に広がるは、サバ缶の山。これ俺が片付けんの？と心のなかでばやきつつ、その山を作ったであろう当人はまだサバ缶食ってたので……

パソコン！！

「いったー！！何する訳！！？今時スリッパで叩かれて漫才する人なんていない訳よ！！？！」

そういつたフレンダの襟首を持って、玄関から出たところで降ろし、そしてドアを閉める。

「ちよっ！？待って、いや待ってください」

ひたすら無視。どうやって、重さ約……て臭っ！？放置臭？部屋の壁にも臭っ！！？と驚愕のあまり四肢を頂垂れた。

「私が悪かったから、ごめんなさい、ごめんなさい、どうか中に入れて欲しい訳！！」

そんな大声を聞いた早とちりな誰かは手を頬に当てて吐息を熱くしたそうだ。

「サバ缶の処理は頼んだからな……」

「それも待って!!?」

「えー」

「このガキ腹立つ!!」

「お前メンドクセエ」

と、第一回サバ缶会議で夜はまだまだ長くなりそうだと。

「いいだろう、そちらの代表は座標移動の結標淡希ムスジメアウキだったな」

「あら、交渉成立ってとこかしら？レムナント残骸だったわねいい任せなさい」

「くれぐれも丁寧に、デリケートな機材だ」

それぞれの思惑で人は動く、これもまた人間の本质。

「科学結社なんて聞こえはいいけど……所詮はやっぱり犯罪予備軍
ね」

そんな取引が行われたのも今日であった。

時差へジサ〈（後書き）

もう学校が始まる時期です。やだなー、学校は行きたくない。ではまた。

狂戦士へベルセルク

いきなり背後からと長い金属状の棒で鳩尾を力強く突かれたことによつてグハツと思わず声を漏らした後に気絶し、壁にもたれ掛かるゲートの警備員らしき人物、以下数名。そして見るも無惨にドラム缶を半分にしたような形に分解されたロボット&無線機&連絡機を含めた通信器具。何故こんな状態に発展したかという。それは少し前に遡る。

いつもと同じ朝が来た。眠い目を擦りベッドから起き上がる。まずは自前の機器のスイッチを入れて情報の整理。

「さーてと今日の話題は……『学園都市七不思議』マイナーだな、普通だな『大覇星祭選手宣誓』全く興味が無いぜ『窓の無いビルの耐久力』核兵器でもびくともしないらしいな?』一夜にして燃えた教会』ノーコメントだな『樹系図ツリーダイアグラムの設計者の一部残骸の噂』聞いたこと無いな?』トップトゥエルブ統括理事の実態』」

今、成神が見ているのはの逐一情報の入るインターネットのサイトだがコメントと呼ばれる機能は付いていないためそこまで知られていない。成神自身、機械には詳しいと断言できそうなんだが……や

はりこついうときの浜面くーんであるため……え？何お前エツチな動画なら、俺にも見せるおおおおおおおおおおおおおおry、と変態オーラが全開な浜面に教えてもらったためにエツチな動画も見られなくはない。

「余計な機能だ……」

そういえばフレンドはというと何でも、寝泊まりする場所はあるという。じゃあ来んなよといってしまつのも何だか気が引ける。

「ここは統括理事、か」

「グッモーニー……ングウウウウウ！？」

自室の扉がバコツと外れて勢いよく飛んできた、止め金具がしているにも関わらず。堅い扉だよね？と、ひしゃげた堅い扉に磁石をつけて金属か確かめてみる。ところでその扉は成神座っていた机と自前の機器もろとも+昨日の部屋にたまったアレをボウリングよろしく、ストライクを決めたため……口から空気の漏れた風船みたいに、ぶおおおおおおおおお！！と変な声をたてながら削板軍覇の身体は朝から学園都市の宙を舞った。

「あーあ駄目だ、こりゃ完全にイカれてるな」

破片を親指と人差し指で掴み確認する。もはや数ミリサイズの基盤まで存在したのが手にとるように解ることから、破壊力は歴然。因みに根性は追い出した。

ようど成神と入れ変わりで学園都市に侵入したとも知らなかった。

「無駄な一日を……っ!!」

何か神経が尖るような感覚を不快感に思った直後、建物は一瞬にして大きな塊により砂の山のように柔らかくゆっくり潰れた。それも刃のある鋭利なものでバツサリというより、刃のない棍棒。例えるなら神の右席の一人『後方のアックア』の所持している撲殺用メイスに近い。

「なんだよ一体……」

以前全焼した教会の影に身を隠し横目で粉塵と瓦礫と化して、今尚崩れている先ほどのアパートを見る。

「恐らくは……力任せに何かを叩きつけたただけなはず……それにしても一発であるの威力」

「一発か、その一発をよく観察しているのはご苦労なことだあああああああああああああああ!!」

頭上から声がした。二撃目がくる、だがそこからは動くこととしない。成神はしばらく黙考した。何せこの場所を管理しているのは『アレ』だ、抜かりがあつて欲しくないと純粹に思う。その勢いよく降り下ろされた塊は、イギリス清教の魔術師がかけた防衛術式に阻まれ、そのまま使用者に鏡で返した光のように弾き返される。

「ぐおおおおおおおおお!? 行ってえー、流石に物理的攻撃で木っ端微塵に破壊できないか」

「アンタ誰だよ？」

「んー？正規の傭兵だ、いや今は雇われガードマン辺りが妥当か」

「ガードマン、つまりは『魔術師』が科学結社に雇われってことか」

「ガキ、随分コチラ側に詳しいようだな」

暗闇から輝かしい聖なる月の光に照らされて目視できた人物は上は赤のトレーナーに毛皮らしき外套を羽織り、下は黒の長ズボンのムキムキ全身筋肉やろうだった。

「名前くらい名乗っておこうか、ベアー＝ストロングだ」

「ぶふうううう！！名前のセンスが、強い熊って……クククククククク」

「こ、このガキイ！？どういうつもりだコラ！？」

ダンツと飛躍した通称『熊』は見るからに、遅かった。笑い話でも何でもないが滞空時間が長い上に武器を振りかざすまでの時間がやたら長い。そして振られたものも、体を右に三歩ずらすことによつて悠々に軽く避けた……はずだった。

「が……くふ……っ！？ば、馬……なっ！ー！」

確かに振りかざされたものは真っ直ぐ降り下ろされたはずだったのに、ダメージは何故か『真横』から体を捉えピンポン玉のように体が二回三回と地面を跳ねた。

「ぐー！……が……ゲホツ！！」

「オイオイ、さっきいつてたの忘れたのか？ 魔術師が魔術を使わなくてどうするよー……まあオマエはもう必要ない、か」

「！！」

一瞬で何かしらの『魔術』で移動する。それには相手側の熊も少しは驚いた。世界の本質に合っていない、学園都市の人間が学園都市の中では学べない知識を授かっているのだから。

「何処で学んだガキイ騎士団にでもいたか、経験豊富？ ウホツ」

一瞬なにか違うヌルツとした汗が背中を流れた気がした、尋常ではない汗だ。口からは刻一刻と迫るガチホモに対して血が滲み出ている。

（恐らくは、瞬発力を一時的に×5くらいに、引き上げてい……るんだろう）

「出てこないなら、こっちから行くぞ！！」

まただ、一見からしてみれば限りなく遅い。どう考えても理解の及ぶ範囲の攻撃力ではない。一旦調査しよう、そう考えて出た答えは……

「全16方位に加えて全8方位からの射撃」

「なに！！！」

成神の囁きにより至るところにグレゴリアの聖歌隊の時のような光の玉がボウツと出現し一点に向かって吸い寄せられる形で集中放火される。攻撃力で表すなら魔術の中では相当低いように態々している。

「まったく、こんなチンケな魔術でどうにかなると思ってるのかあああああああ！！！」

豪と勢いよく降り下ろされた塊は、確実に頭を狙ってきている。その浅はかな考えを読んでいた本人は片腕の掌の部分で塊を掴むと同時に口からの血が滲んでいるのも気にせず相手を観察する。そこであることに漸く気付いた、近くでしかもその急接近の後ではないと分からないことに。

「息切れ？いや何かの、反動……単発的な攻撃、力の増幅、異常なほど急接近……そして弱体化、そうか」

「チツ、ハア……ハア、流石に……体に響くな」

唐突に力の抜けている相手に対し、確実な情報を手にいれるために現状を打破するために。闇の中から光を取り出す策は成り立った。

「アンタ、日本語で狂戦士バースカーの……いやベルセルクの忘我状態である強化と虚脱状態の弱体化をベースとした北欧神話を取り入れたな」

「フツハツハツハ！！今更気づいても遅い、時期にテメエもくたばるよ！？……ア？」

ゲラゲラと大声で笑い出すベアーの笑いが一気に冷める。成神の体に痛々しい傷がないからだ。

「本気でやらなくて正解だった、辺り丸一面焼け野原の荒野に変身させたら怒られるしな……」

「は、ハハハハハハ！……ふざけんなあああああ！？クソツタレがあああああああああああああああああああ！
！」

勝敗はそこでついた。別段、辺りを焼き尽くす業火を使わずとも空間すら断ち切る魔術を使わずともたった一つの『神』という起点だけで肩はついたのだった。

狂戦士へルセルク (後書き)

取りあえず書き終えました……

現在時刻 1:19 です、おやすみなさい。

(〃。-。) (〃。 |。)

運命の人へウンメイノヒト》

結局、昨日……もう今日だったか？の深夜はボロボロの服のまま帰ろうとしたら変質者扱いされた挙げ句、野宿で一晩明かした。疲れていたのだろう……そのせいか知らないが無能力集団の集会で思ってもよらないことを口にした。

「ナ・ン・パ、しょうぜ」

周りにとってはいきなりだった。

もう一度振り替えると、今日は何にする？の話題で駒場は大覇星祭前の子供たちの手伝い、それには不平不満はなかった。半蔵はかくれんぼしようぜと、これには唾液の雨が……汚っ！？汚い、誰だ俺の顔に向けて唾ふいた奴は！！吹き返すぞゴラア。次に浜面（笑った奴）はATM強盗、ちったあ懲りると。理由は大覇星祭前なので警備員が異様な程、肌にピリピリする視線を刺してくるから。

そして浜面の次は順々に回って俺だった。いやまさか俺だって自分に回ってくると思っただが考えてはいなかったので、いきなりだったことに動揺し支離滅裂で思ったことを口にしてしまった。

「俺の耳が壊れたかお前が壊れたかしんねえーが、今ナンテイッタ？」

あの、無表情で無関心な駒場ですらGokuriと生唾を飲み込んだレベルだ。半蔵も欠伸の体制で顎が開いたまま閉まらなくなったように目を見開いたまま固まっている。

「噛みました、浜面死ね」

「ワザとだろ、そして何で!!」

「垣間見た、カッコ浜面死ねカッコ閉じる」

「なにを!？頼むからもう言わないで!!」

「浜面死ね、ニヤッ」

「ニヤッ、てなんだよおおおおおおお!!理不屈
ううううううううううう!!」

「というのは嘘で……」

「どこから嘘なの!？」

「まだナンパしてない」

あ、そこらなんだ……と何故か皆が皆気持ちが一致した瞬間だった。ずっこけるのではなく敢えて平行線上のことである。

「ところでナンパでどうやんの？」

「暗闇に連れ込んで……」

?????????

「……性犯罪はノーだぞ」

半蔵エ、テメーの分野はそっち系か。

「わーってる、わーってるよ駒場のリーダー」

浜面エ、わーってねえだろ、その証拠に今何か隠したろ。

「とりあえずここじゃなんだしよー、人通りの多い表通りにでも行くうぜ、半蔵と俺と駒場と成神で」

「ダサツ、男だけで行くとか（笑）」

「ていいながら、髪をセットしてんじゃん。半蔵は帽子被るから大して変わらねえ」

「るせー、浜面のチンピラ」

「はい!？」

「……俺はいい」

「駒場はずつと前にいったXLサイズのサンタクロースの下見にいかねーのか？」

「そうそうリーダー、握りしめて壊したじゃん」

「ハツ……そうだったな、行くでしょう」

「この時期にサンタクロースの衣装は売ってないだろ（笑）……てか、全く話しに入れん」

浜面&駒場&半蔵&成神（一人だけ分かってない）はそんなこんなで……駒場の旦那色んな意味で目立つぜ。残った面々も何人かの集団で動いているが、休日だからな。目立つこともないだろ……えーと8月31日が月曜日だから、火水木金土日、月火水木金土日で恐らく日曜日あたりだろ（笑）と鯖読みくらい大雑把な暦である。にしても最近本当にダルい。この時期になってもまだ夜中に蚊がブーンブーンと五月蠅いのだが暑くないだけ有りがたいが。

「バカ、な……売っているだと」

「ハイ 当店では四季に関わらず商品を置いていきますので『サンタクロースの衣装』をお求めに？それにしても、まー……お客様大きいですね」

「……フフツ」

褒められたの？か少し嬉しそうにニヤリ、いやでもそのニヤリというよりも妄想してないか？駒場。でも怖いから薄気味悪いから、駒場の赤い姿とかゾクツとするおー。

ここは通称『セブンスミスト』なんでも、ここなら大抵のものはあるらしい。夏は冷房。冬は暖房。春と秋は湿気対策に花粉症対策、といった様々な面で四季に対応が取り柄らしい。因みに今はえーと、

い、い？なんだっけ？

おおー、まいなすいおんとかいうのが出ているらしい。

「にしても……広い、ここ何処？」

少し目を話せばあの巨体の駒場が目立たないレベルってどうなん？
迷子になったら終い、恒例のアナウンスで呼び出されるパターンか？
等と一人でほんわりオーラをだしていたら。

「止めてください！！」

「うわっ、なんか前にも似たようなことが……てかあん時と同じ男
じゃね？」

しかもまた常盤台トキワダイときた。よっぽど常盤台には縁があるのだろうか？

「何なんですか貴方たちは！！」

「おおーおっかない姉ちゃんたちだねー、でも可愛いぜ」

「私たちが何かしたとお思いですか？」

「へへへ、そんなことなんざ思ってねーよ、お嬢ちゃん」

「おおー、相変わらずバカやってんなチンピラ諸君？」

掌でポンポンと肩を軽く叩き、意識を自分側に向かせる。

「ア、ア？……てえ！？あ、アンタはあん時の！！す、すいやせんでした！！」

「ヒイツ！！？」

「久しぶりだな」

「ヒツ、すいやせんした！！も、もうしませんから！！」

「そ、そうですぜ！！」

「ほら、行くぞ！！」

「ワケワカメ……俺には何がなんだかさっぱり」

で、結局のところ尻尾巻いて逃げていつてしまったので……？と頭の上にもクエスチョンを出現させている成神は全く理解していない。

「えと、先立ては粗暴な殿方に取り囲まれているのを助けていただき。誠にありがとうございました」

「もし貴方様がいなければどうなっていたことか、本当に感謝して

おります」

「大げさだが感謝されるのはいいな、まあどういたしまして」

「まあ……自己紹介が遅れましたわ、度々に渡る無礼の数々申し訳
ございません」

「その、わわわ私たちは常盤台中学の生徒で私は湾内絹保ワシナイキヌホと申しま
す」

「私は泡浮万彬アワツキマアヤと申します」

これまたご丁寧^ニに会釈やら尊敬語か謙讓語か区別までは出来ないが
丁寧な言葉がずらずらと並ぶ。うわっ賢者だな、とも思った。

「名無しです」

「奈無様ですか？」

「いえきつと七獅様ですわ」

「あーなんかややこしく……成神慶太です、はい。様ではなく、さ
んでいいですから」

そうなのですか？と確認した後で泡浮と湾内の二人は顔を見合わせ
るとアイコンタクトを交わすと頷き合い。

「では成神さん、一先ずこの度の件につきましてのお礼をさせてい
ただけませんか？」

「結構です」

「え！？でもそれでしたら、私たちの気が治まりません！！」

その女性が涙目だったのだが実をいうと成神自身もらい泣きがすく……悲しくもないのに涙が。

「また今度、機会があったらゆっくり」

「あつ、お待ちになってください！！」

片手を挙げて超ダツシユで現実逃避と現場逃避。今、目の前の壁から特徴的な金髪をちらつかせるのは、間違いなく浜面であった。なにより浜面オーラ（只の……悪臭、とか？）がある。

「よし帰るぞ」

「はっ？いきなりどうした？そっぴや駒場は不器用だから先に帰えつたてさ」

「んなことはどーでもいい！！理由は後で話す！！」

『成神さん』

「女が呼んでるぞ？」

「テメーこの浜面様に黙って愛の逃避行か！？」

「いいから走れっつてんだよおおおおおおお！！」

「摩擦で尻が焼ける！！ぎゃああああああああああ！！！」

「頭がガクンガクンで揺れて、ぐおおおおおおおおおおおおお！！！」

浜面と半蔵の服の襟を掴んで引きずった状態で陸上選手並みの力を発揮して逃げる、逃げ切つて見せると思つた成神であつた。

「はあ、はあ……足のお速い殿方でしたわ、流石は私たちに迷惑をかけまいとする優しい殿方です」

「それにしても結局行つてしまわれましたね……」

「で、あの殿方は一体何処の誰のですの？」

「はい実はあの殿方には先程助けをいただいたのです、て白井さん！？」

「いつからそこにいらっしやっておられましたの！！！」

息を切らしている二人に対して、全く息も何も大丈夫な白井黒子シライククロコと呼ばれる、学園都市に限られた数しか居らず三次元から十一次元のテレポーターなんちゃらである空間移動。

運命の人へウンメイノヒト》（後書き）

駄目だ、文章がまとまらないし……今回は計画性がありませんでした。（x|x;x）

いつも通り読んでくださる方はありがとうございます。初めましての皆さんはよろしくお願ひします。次回も頑張りますので期待しないでください。えっ、と思った方は
正しくないor正しい

公 附着へハムスタータッチ

自動販売機とゴミ箱の間に顔を突っ込む人が見かけられたそうだ。

「……………」

「……………」

ピクリとも動かない動物たちはジッと互いに見つめ合ったままだ。
と……いきなり始まってしまったがこの会話文Xは『人間：猛禽類』
であることは、察して欲しい。

「……………チュー」

「ハムスターで、チューで、鳴くのか？」

今にも消えそうな声を何処かの戦場カメラマンみたいな独特なしゃべり方を使い疑問文として相手に語りかける人間^{ナルカミ}。チューチュー、
としか言わない『名称・ハムスター』はいきなり動き出したかと思
うと、まずはしゃがんでいる俺の膝の上まで驚異のJUMP力を見
せつけるとツツカツツカ俺の腕を昇り、肩を過ぎ髪を掻き分け
て頭の上でチヨコンと座った。散々、体を走り回られた成神の肩は
震えていた。

「こんの下等生物風情エ……人間様のでっぺんにたつたア、大した
身分だなー!!」

「チュー」

丁度旋毛の上に座ってるせいか、成神が変な奇声をあげながら白眼

剥き出しの状態でも見えない。

「…………チュー」

「今、ニヤツとしたるこの公　？見えん…………くそつたれが！！」

と憎み口を叩きつつも、振り落とさないのは成神だからこそその優しさ。仕方がないので成神DXとなったまんま、浜面たちのところへ戻る、と…………

「お前、遂に癒し系に進化したか」

「チュー？」

「いきなり頭に何引っ付けて帰ってきてんだ！？ギャハハハハ…は、腹が、いてえー」

「…………キュン」

「駒場あああああ、お前は何故ときめいてんだあああああああ
！！！」

「チュー」

「だあ！！チューチューうつせー公　が！！！！」

「公…………ハム、スターか、星が黒いのは獣の証拠か！！」

が追い返された。いや無理矢理でもよかったんだけど、ね？皆さん『特に子連れ』が多い時間だし。

「ママー、何あれー？」

「しっ、見ちゃいけません！！」

という具合なのだ。

こんなことをしている間にも刻一刻と俺は撮られ続ける。いい身分だよな公 はドンツと居座ってるだけなのに、可愛いくとか叫ばれて。

「猛禽類とか食えるよな？」

「ビクッ!？」

今反応したってことは、食えるに違いない。とその時だった目の前にアイツが立ちはだかったのだ。金髪ハイトの中学生？が。

「貴方の精神乗ハイトつとちゃうおうい!!!？」

「いえてねーぞー食蜂」

「何その合体した姿!! 待って動かないで!! 今すぐ写真撮るから」

両手の親指と人差し指で写真撮る前みたいなきことをした後で、えー

ら……

「フンフン〜 フンフン〜 フンフン〜 ……へっ?」

「はい?」

「チューノノ」

うん、コイツは獣だな。そこにはシャワーを浴びる一糸纏わぬ姿のフレンダがいた。濡れた金髪は輝いていて、フレンダ自身結構綺麗な体つきしてい……

「っ~~~~~!」

ドカッグシャバキツボコッ!!!??!?

「あん?今、プロメツサの生命反応消えなかったか?」

「知らねーっの、私興味ないし」

「異郷の猿のことなど眼中にありませんが?」

「知らん、今の学園都市に単身乗り込んで確認などしないのである」

「何だ、俺様の気のせいか」

「ハツ……ココハドコ？ワタシハダレ？」

何故かベッドの上に仰向けでいる。さっきまで何か見てたようなど、うつすら思い出……

「ざけんじゃない訳よ!!」

せなかつた。どこもかしこも似たような作りのマンションなため、大して床と変わらない高さの、今自分が寝ているベッドに先程大声で怒鳴ったフレндаが腰かけていた。

「おーおー、こんにちはフレнда」

「コイツ……何時か締め上げる」

「そついや公 は？」

「ハムスター、てあのカワイイ生物？」

？を浮かべて首を捻るフレнда。猛禽類はそんなに可愛いのか。

「そつそつ、軽くソテーにしてやるつと思ってるんだよ」

「エッ食べるの？それにそんなの知らな、あんっ」

「あんっ？」

「やだっ………フッフ、こしょぐったい、訳よ」

もう容赦入らねえ、と確信した。最期に公 に向かって一言。

「やっぱりケダモノが」

公 付着へハムスタータッチ》（後書き）

何回もいただきますけど、今回の公 〓ハムスターと読んでください）
笑）

明日はテストなのに 勉強しろ、と思っ た方は
正しいor正しくない

追跡者へシヨクホウミサキ

前回は振り返ろう。成神に付いてきたケダモノは……（以下略）
遂に金髪の思春期の女の子にその忌々しい牙を向くのであった。

「ふにゃ、くしゅぐったい……」

ベッドの上でゴロゴロ……ゴロゴロ……という具合に転げ回るフシ
ンダ。

「あ、……やんっ」

何か……ケダモノより『は』可愛いと思う成神であった。ひよこっ
と服の外に首を出した瞬間、動体視力関係ないキヤツチ。

「おし捕まえたど、さて……」

グワシツと鷲掴みにした肉塊ハムスターを同じ目線に持ってくると……

「ソテーにしようか（する訳よ）」

「チユウウウウウウウウウウ！！！！？！！？！！？」

の改竄力で消してあげようじゃないか」

「結構です、さて気を取り直して」

「レッツ、クッキングー」

「orz、セリフ取られた……けど作るの俺じゃね？」

「むー……なんなのよこの女は？」

本日の献立は、普通に炊いたご飯と焼いた鮭の切身とアサリの味噌汁………って和風？下位学生レベルだから大体のマンションは家具も最低限しかないから、二人はベッドに座っている。

「悪いな、お嬢様からしたら不便だろ？」

「んーん別に、にしてもすごっ！この食事とか常盤台^{トキフダイ}中学の学食じゃ絶対ありえない、安すぎる魚？げっ骨多い………ハムツ、モグモグ」

「そっぴゃ最近はずううっつとサバ缶だったもんねー……でも鮭は個人的に好きにはなれないわ、パクパク」

「……モグモグ……ズズウー………」

黙々と食べる成神に対して普段はギャーギャー騒ぐ二人は気まずさを感じたのか、成神に見えないよう背中を向けて話し合う。

「ちょっと貴女はモグモグゴクンツ、話の種の一つでもないの？」

「んー、ズズウー……さあ？何時ものことだし、ほっとけば問題ないんじゃない」

「やれやれ、と手を上げ首を振る。」

カチャカチャと食器や箸が水の中でぶつかりあう。いやシユールな光景だ、頬杖をついて此方を興味津々に覗いている食蜂。

「ほへー、片付けまで自分でやるんだ……」

「んう？そりゃ、俺だしなー」

フレンドは居心地悪そうにモゾモゾしていて、時々食蜂と成神をチラチラ見定めている。

「（なんか私が悪者みたいに感じるのは何故な訳よ？）むむむ……」

「…」

「あ、思い出した……そういや食蜂は何でここにいった？」

「夜這い」

「ブツ!! × !!?」

「いやそれ、多分男がするもんだから………て…え、はああああああああああああ!!?!?」

「冗談冗談(笑)」

「ふにや///」

「お前が言ったら冗談に聞こえねーよ!?!」

「んじゃ、冗談の状態状態で状態であって状態なくて、て、ありや? 解んなくなつた」

「今の言葉のままだと冗談じゃないこと指してるから!!?! てか冗談の状態ってなに!?!」

「パクパク///」

「えーぶーぶー、まあ冗談だつてばよ!!?!」

「某アニメのキャラクターの言い方パクってんじゃねーよ!!?!」

「チーン///」

食蜂はオバ「ニコニコ?」お姉さん!!、が手招きするみたいに片手を頬に片手で猫みたいに振る。俗にいう「あらやだ〜奥さん」的な感じだ。

「メンドクセエ」

「何かな？私と喧嘩でもするのかな？」

「一体なにをどうしたら喧嘩に話しが飛ぶんだよ！？てかおまつ、
帰れ！！」

「ふむふむ照れ屋さんだね、食蜂さんと喧嘩したいなんて……か
かってこいやー」

ふぁいていんぐぼーずと気の抜けた声で言われても成神が困るだ
であつた。

「ウゼエ」

「愛がないよ！！？」

「テメーにやる愛なんてあるか！！てか俺相手に喧嘩したら、弾
みで殺しちゃうかもしれないから喧嘩はダメ絶対！！」

「私も舐められたものですね、仮にも超能力者《レベル5》の心理
ルアウト掌握ですよー」

「分かった帰ってください食蜂さん」

「何か言いましたか？」

「テメーの春を殺す」

追跡者へシヨクホウミサキ (後書き)

もう後半から訳わからなくなっていました。戦闘シーンは未だに勉強中。皆さま方これからもどうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9202u/>

とある天使の潜在能力

2012年1月12日01時04分発行